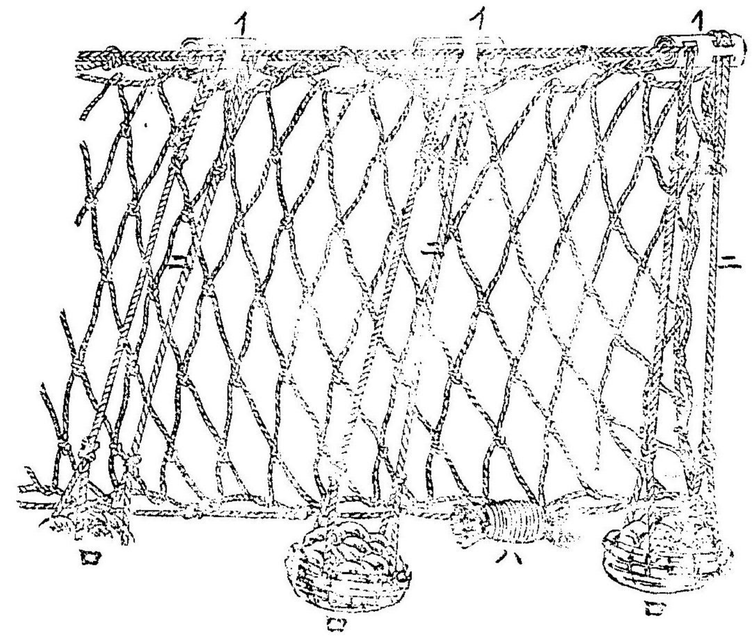
第百八圖　鮪建網の建方




中の口筒沖の目筒杭筒鼻筒及び「シド網」中の緊要なる筒には柴を以て周圍三尺許の輪形を作り之を繩にて籠の如くに綴り中に石數十個を詰めたるものを碇とす方言之を「シカリ」と云ふ碇綱は徑二寸五分より四寸に至る各其裝置の場所に依て大小の差あり

魚見櫓は身網の後部卽ち沖の方の中央に位置を取り身網より凡二十八間の距離にて海中に建て置き魚見番は其頂上に設けたる棚の上に登り居て魚



の群來を注視す櫓の構造法は尙ほ臺舍部に於て詳說すべし

網裝置の順序は最初に魚見櫓を据へ附け次に杭筒次に沖の目筒、鉤の鼻筒、中の筒等を据へ附け以て網の基礎を作り夫より桁網を入れ筒を附け然る後垣網を入る此網代場を定むるには杭筒の位置を擇ぶを第一緊要とす然るに此網は魚道を遮るの構造なるを以て其位置の如何に依ては他村の漁利に影響を及ぼすこと少からず故に中には其關係村方の立會を要する所も之あり此網を全く据へ附け畢るには人夫三十人日數四十日程を要す每年陰曆一月下旬より着手し三月上旬に落成するを常とす

漁法は漁夫の數凡三十人乃至四十五人を程度とし之を五六人づゝに分ち一組と爲し每組抽籤を以て順番を定め內二人は魚見櫓に在て魚の來路を注視し他は船を網口に繫ぎ魚の入りたるとき魚見番の合圖に依り引立網を引揚げ網口を閉塞するに備ふ而して魚見番は鮪の網に入りたるを認むれば櫓上に旗を揭げて合圖を爲し若し鮪の數非常に多きときは旗竿に簑笠を吊して信號となす方言之を「コボテ」と云ふ陸上に在る乘漁夫等之を見れば直ちに船を漕出す其船は胴船三艘連

搬船十艘乃至二十艘にして胴船は一の大木を刳鑿せる所謂丸木船を用ふ是大魚の奮跳するに觸るゝも毀傷せざるを旨とするが故なりと云ふ此胴船の至る頃は已に魚見船にて引立網を引揚げ網口を閉塞しあるを以て胴船は其處に並列し尻夾筒の方より網を繰揚げ其繰揚げたる網の一端は漸次海中に落し終に魚捕りの處まで魚を追ひ詰め鈎を打掛け捕獲して之を運搬船に移し陸上に送らしむ

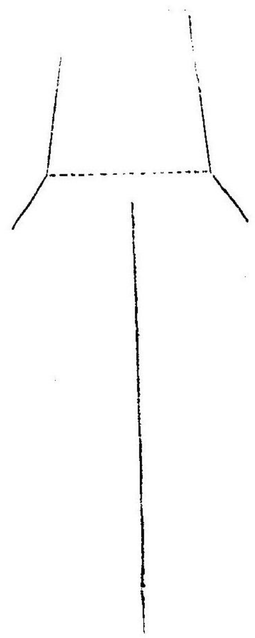
又鮪の數非常に多きときは別船を以て網の周圍を衛護す其法「高ニコメ」筒より「裏ニコメ」筒までの網端を持し魚の逃逃を防ぐにあり又網中の魚を未だ全く捕り盡さゝる中に復た引續き魚群の來るときは引立網を揚げ置き前魚を捕り盡したる後引立網を下し次の魚をして身網に入らしめ前の手續を以て之を捕ふ若し大群にして網口に入り盡さゝるときは「小サキ」より二番鼻筒までに別に五厘網と稱する細繩製二尺目に編みたる網を下し魚の他に散逸するを防ぎ置き漸次に魚溜より網口に逐ひ入れて之を捕獲するなり

## 第二　鰊建網

鰊は本土に於ても北方の地にては漁獲ありと雖其盛漁あるは北海道に比肩すべきものなきことは衆の知悉する所なり然れども全道の沿岸悉く其漁場なるにあらず主たる漁場は西海岸と東海岸の東部とにして就中西海岸卽ち日本海の沿岸に於て好漁場多しとす之を漁する網器は建網、刺網、曳網の三種にして其大利を占むるものは建網に在り

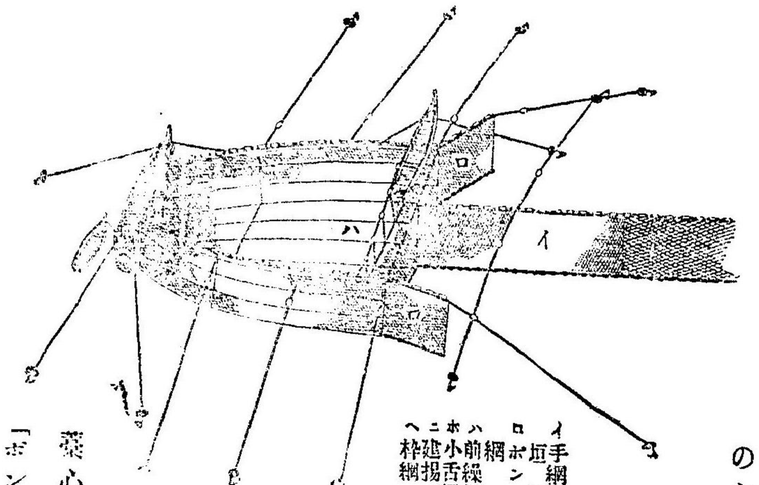
抑北海道に於ける建網に「イキナリ網」「カナヲリ網」「カク網」「フクベ網」「ダイボウ網」の數種ありと雖主として鰊漁に用ふるものは「イキナリ網」とす而して鰊は北海道重要漁業中の重要なるものなるが故に單に建網と稱すれば卽鰊漁の「イキナリ網」を謂ふなり其漁季土地に由て遲速あり網の構造も亦一ならずと雖今其一を掲ぐ

第百九圖
鰊建網裝置全形



北海道西海岸に於ける鰊漁業の季節は早き地は三月十五日頃に始まり五月中に終り遲き地は一ヶ月許後れて始まり六月十日頃に終る其初期卽ち清明前後のも

第百十圖　鰊建網




のを走り鰊と稱へ春土用の頃のものを中鰊と謂ひ土用後のものを後鰊と云ふ漁場は海岸より七十間乃至二百五十間の間を普通とし中には三四百間の遠きに至る處あり深さは六七尋より十一尋に至る

網の構造は後志國小樽郡小樽町渡邊兵四郎氏が曾て第三回內國勸業博覽會に出品せしものに就て記さんに手網ポンテ網、前繰網、小舌(又奥車とも云ふ)建揚の五者を以て全體を爲す其裝置の樣式第百九圖の如くにして之に枠網を添ふものとす

手網は上圖中の(イ)にして所謂垣網なり秋田產藁心製繩網にして網目四寸丈け二丈五尺長さ十丈「ポンテ網は其(ロ)にして同上の繩網二反半を用ふ丈け凡て二丈五尺長さ二丈前繰網は其(ハ)にして麻絲網三寸目横五十目掛長さ五尋を一反とし十反を用ふ幅凡て六丈長さ七丈五尺小舌網は其(ニ)にして麻絲網一寸目横五十目掛二十二反を用ふ幅凡て五丈五尺長さ六丈五尺建揚は其(ホ)にして同上の網地九反を用ふ幅凡て二丈二尺長さ三丈とす(ヘ)は枠網にして同上の網目なれども特に太き絲を用ひ三十反以上を要す幅凡て六丈長さ四丈五尺其兩端に綠網を具ふ使用の際には之を二折して縫合せ囊狀を爲さしむ綠網の部は其囊口となる此網は最も堅固なるを要す故に良質の麻を擇て製す之を裝置するには先づ第百九圖の如く網を亘直し錨を以て之を鎭定し而る後網を結び付け張下す其要手網を海岸より一直線に沖に向て張出し身網は陸に向て口を開き魚の兩側より來るもの先づ手網に遮られ次に「ポンテ」網に支へられ終に迷ふて身網中に陷らしむるに在り

漁法は起し船一艘に漁夫十人乃至十人餘乘組み口前の脇に備へ帽子船には漁長他の二三の漁夫を率ゐて乘組み船下に枠網を備へて建場に在り船頭は斷へず網中を覗ひ魚の入るを認むれば號令一喝聲に應じて起し船は口前に乘出し前繰網

より漸く繰り揚げ魚をして小舌網に乗らしめ猶繰迫めて建場に至れば船頭は網を弛めて建揚を卸し魚をして建揚を超て船底に吊る所の枠網に入らしむ故に枠網の縁の一部と建揚とは相緩合し置くなり而して魚枠網に滿ちたるときは建揚と分離せしめ更に代りの枠網を前の如く裝置し其分離せしめたる枠網は波靜かなる處に引き行き其中の魚は擡網にて抄ひ捕り別に備へたる磯船に移し陸地に運搬せしむるなり

## 第三　根拵網（ネコソギアミ）

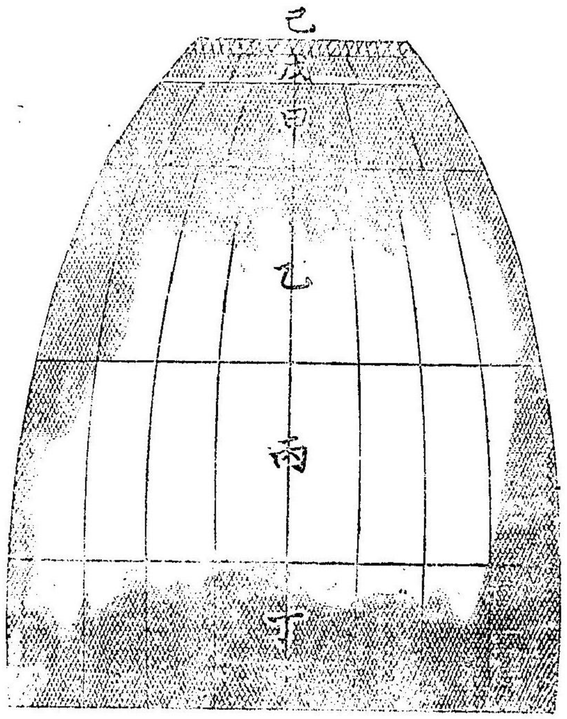
伊豆國賀茂郡伊豆山村等相模接近の各浦より相模國足柄下郡眞鶴村方面及び小田原町近傍等に於て多く裝置する處の根拵網は大魚は鮪、鰤、鰹、鰹の類より小は鯖、鰺、鰯、シラスの類に至るまで捕獲して漏す所なし此網の創始は天保年間にあり傳へて曰ふ當時加賀の人某豆相の間を遍歴し伊豆山村に足を駐め海面の實況を視察し此網を用ふるの利あるを示し之を創始せんことを皷舞せり然れども該地人民は專ら農樵を事とし漁業に疎く且網の構造巨大にして費用多額を要するが爲め當時之に着手する能はずして止む後漸く近隣に傳聞し有志者老漁と相謀り之を新設せしに漁業頗る利ありしを以て次第に增加し今は之を用ふること甚だ盛なり漁業の季節は陰暦二月卽ち彼岸前後より七月下旬までの間を春網と稱す近來に至り八月以後十一月までも此漁を爲す之を秋網と稱す漁場は豫め定處あり大抵海岸を距る二三百間乃至四百間までにして深さ三十五六尋乃至四十二三尋の處とす

此網を布設するには先づ漁船二艘を以て沖合に漕出し適當の位置を見定め左右に分るゝこと凡五十間にして各二條の大網に土俵數十を結て沈下し其上端に浮竹一束を結び附く之を端先と云ふ次に端先を距る凡百十尋許の沖合に臺木と稱する大なる浮子を泛べ之に臺碇綱八條を結び又臺碇綱の末に土俵數十を結び附け海底に沈下し風浪の爲め臺木の流動するを防ぐ次に側網と稱する網に浮竹數十束を結附たるものを以て各其一端を臺木の兩邊に結附け之を引伸はして端先に至り浮竹に結ふこと左右共に同ふし以て網を張るの基礎を定む端先の浮竹は周圍七八寸のものを長さ一丈二尺に切り數十本を束ねて周圍一丈位とし三ヶ所

を綯り別に綱の周圍一尺位なるを其中に通し端を竹束の外に出し以て網を繋ぐに便す土俵は米の空俵に小石を充たし其中央を六寸周圍位の藁綱にて縛る其總數凡八百四五十俵を要す臺木は杉又は檜の周圍凡五尺位の丸材三本乃至五本長さ四尺二寸許のものを聯ね横に「ヌキ」を通して枠組となす

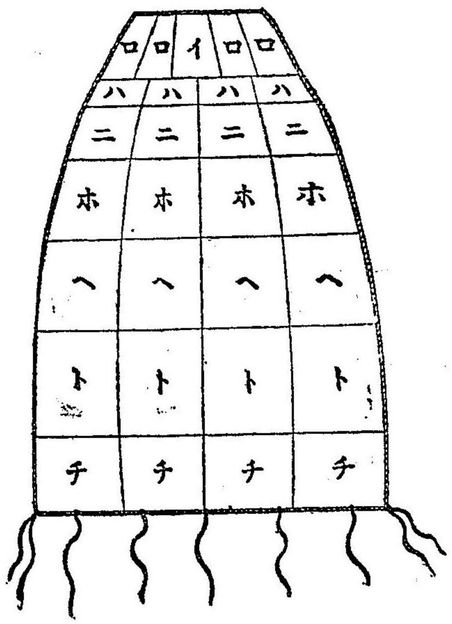
右の裝置を畢へたる後網を張る其網は大網突出網の二者より成る大網は魚捕りの部分は麻絲製にして他は藁心を用ふ構造は第百十二圖中の(イ)は魚捕りにして尚其魚捕りの仕立方を細説す

第百十一圖　根拵網の魚捕部

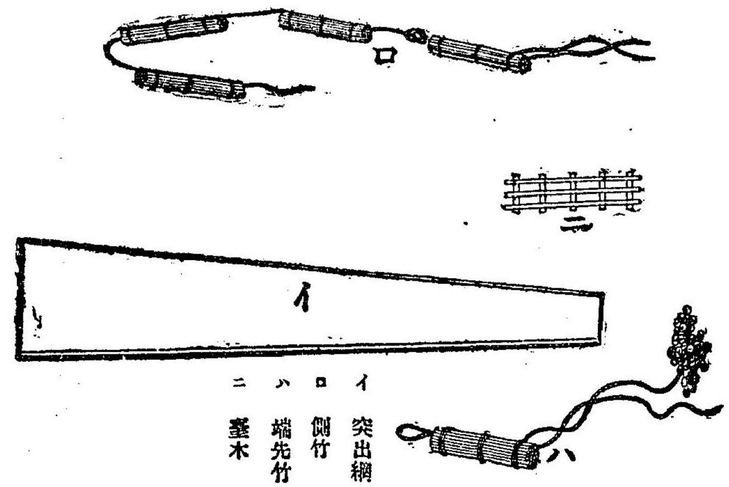



れば第百十一圖の如く其圖中の(甲)は五間十四節百掛を六枚横繼にして竪目に用ふ長さ三尋乙は同上八枚長さ七尋(丙)は(乙)に同し(丁)は同上八枚長さ五尋(戊)は前垂と稱ふ同上四枚長さ一尋(己)は荒目と唱へ三つ刺六掛一枚長二尺竪目に用ふ以上の網地を上を一尋二尺左右を十四尋下を七尋二尺に縫ひ縮め以て魚捕りを仕立揚く(ロ)は五寸目十四尋横繼竪目に用ふ目數横に下にて七十五掛上に至り十四掛までに落す之を魚捕りの左右に二枚つゝを附く以下の各網は皆横繼竪目なり(ハ)は五寸目五尋上部横七十五掛下部百十掛(ニ)は一尺目十尋上部横五十五掛下部七十五掛(ホ)は二尺目十二尋上部横三十五掛下部六十五掛(ヘ)は四尺目百二十立にして九十六尋位となる上部横三十三掛下部三十六掛(ト)は五尺目立卽ち百尋上部横三十掛下部三十三掛(チ)は六尺目十

第百十二圖　根拵網仕立上



第百十三圖　根拵網副用具

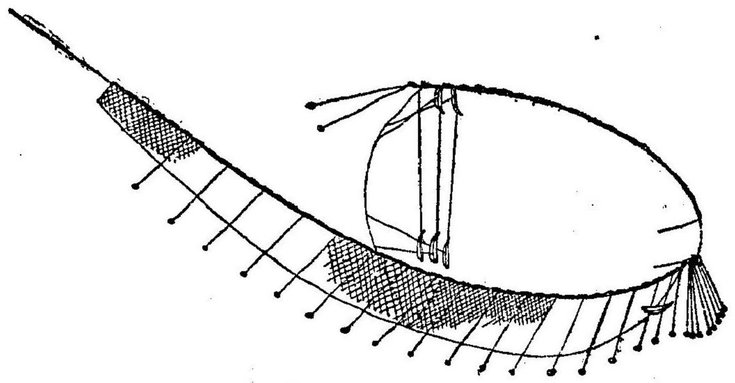



二立にして十四尋となる上部横三十掛下部三十三掛とす而して之を棕櫚製周圍三寸五分許の縁繩に結附け網口の幅四十尋奥にて幅四尋左右五十尋に仕立揚く

突出し網卽ち垣網は網目五尺とし網丈け及び横目掛數は一定せす都て漁場の景況に從ふと雖網丈けは裾の海底に達して猶少しく餘裕あるを度とし長さは海岸に達せしむるものとす

網を張るの順序は網奥の幅四尋の處を臺木の丸材の上に懸けて「ヌキ」に結附け夫より左右を側網に結び而して網奥より一尺目まての間は側竹を三尺距離に附け網目の疎くなるに從て距離を多くし終に六七尺の距離と

第百十四圖　根拵網裝置全形



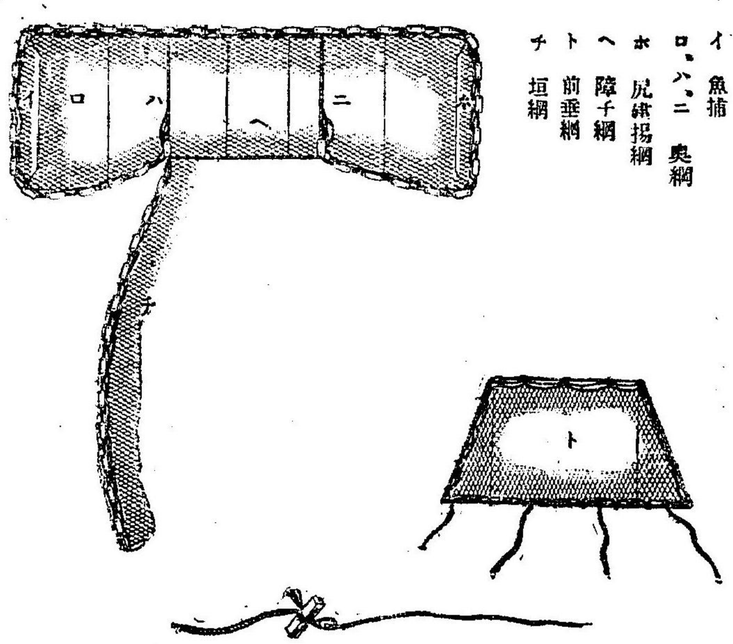
なす又臺木の中の丸太より九條の土俵網を下し一條毎に十五俵乃至十六七俵の土俵を附け海の深さ四十尋位ならば網の長さ九十尋とし臺木の背後に向て斜に張下す其網は藁繩製にして周圍七八寸なり網の左右には各十七八條の網を出し之に十俵位つゝの土俵を附け同しく斜に張下す端先に用ふる網は特に太くし周圍一尺二寸位のもの二條にして之に六十俵乃至八十俵の土俵を附く網の長さは海の深さに應じ端先竹の頭の水面に出沒する程なしむるを度とす之を裝置し畢れは網口の左側若くは右側に接續して突出し網を張る此突出し網は潮流の模樣に依り左右孰れか一方より出し末端は海岸に達せしめ上端には一丈距離に側竹を附け網裾には二間距離に重量二貫匁の石を附け尚ほ別に百

尋毎に綱二筋つゝを出し一筋毎に土俵四五俵を附け其一筋は内側に下して綱を直立せしめ一筋は外側に下して斜に張り末端には留め碇と稱へ一筋の綱に七八俵の土俵を附け斜に張り下し以て綱の激動を防ぐ

漁法は常に漁船五艘を備へ外に魚見船一艘合せて六艘を要す其右方海岸に寄りたる方即ち網口にあるものを大中船と稱し漁夫七人乘次を地の中船とし五人乘次を「アマ」船とし六人乘、左方側網の端に位するを沖の中船とし五人乘次を沖の脇船とし亦五人乘にして魚見船は網の三尺目と四尺目と相聯絡する邊にありて魚群の網に入り來るや否を監察し魚來りて網に入るを認むれば各船に指揮して網口の左右より繰揚げ終に魚捕りに逐込み大魚は打鈎を用ひ小魚は攪網(方言「サジ」)を以て抄ひ捕るなり

## 第四　鱈建網

陸奥國下北郡脇野澤村字九艘泊に於ける鱈建網は櫛引福藏と云ふ者始めて明治十九年より使用せる所にして漁期は冬至十日前より始め大寒の終りに至る漁場




第百十五圖　鱈建網

の深さは十五尋許にして水底平砂又は處々に小岩ゐる所なり

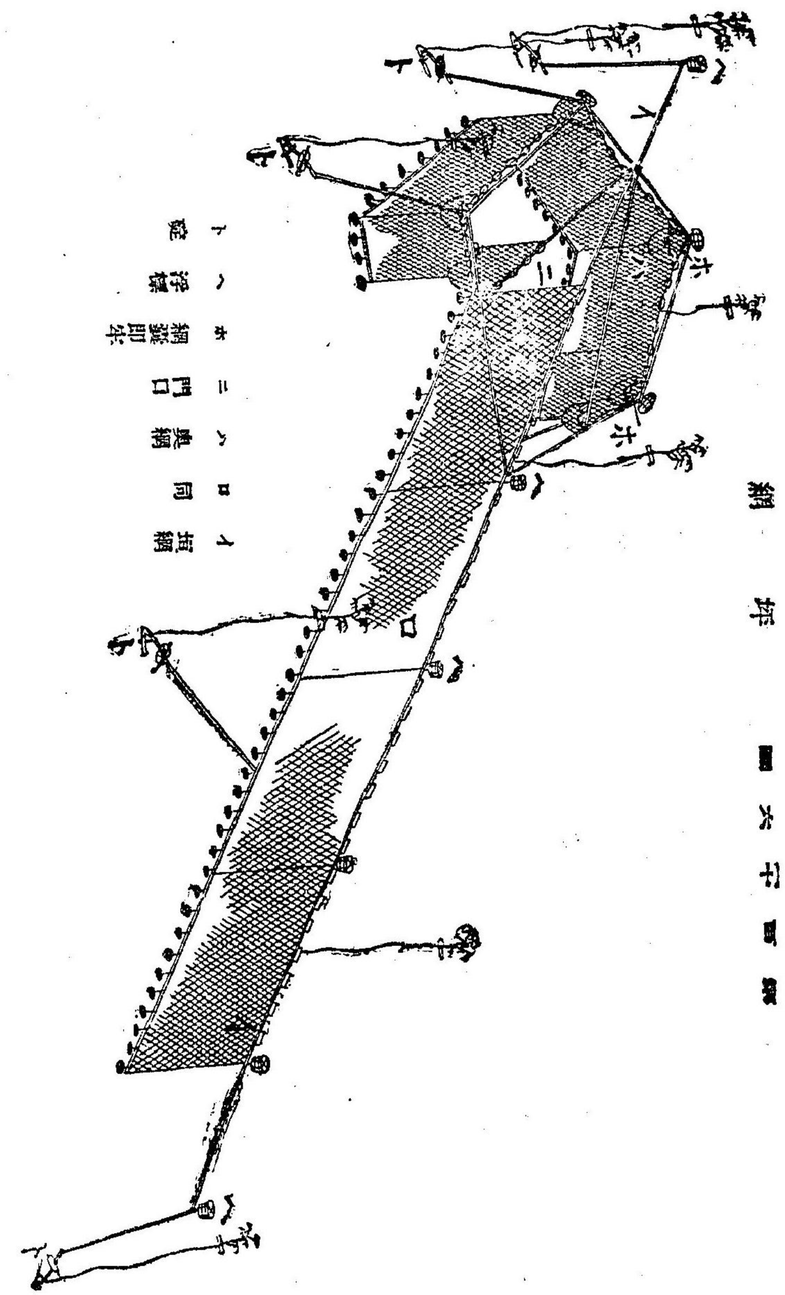
網の構造は圖中(イ)は魚捕りにして網目三寸五十目掛十五間切六枚を合せ九間の肩繩に結卸す(ロ)は三寸目五十目掛二十間切二十二枚(ハ)は同目五十目掛十間五枚(ニ)は同十五間切二十二枚(ホ)は尻建揚網と稱し同十五間切(ヘ)は障子網と稱し同五間半切六枚を合せ之を肩繩に結卸すこと(ロ)は片側十三間(ハ)は七間(ニ)は九尋二尺五寸(ホ)は九尋(ヘ)は四尋半とす(ト)は前垂網と稱し三寸目五十掛十一間切三枚を合せ其左右へ

同目二百目掛十一間一つ目まで目を落したる「サヽ」網を附け之を渡り網九尋に結卸し魚の入口に附設す(チ)は垣網にして藁縄を以て製す網目四寸五十目掛九十間五枚を合せ之を六十五尋の肩縄に結卸す肩縄は藁三つ打徑一寸五分位浮子は杉の角形にして長さ二尺五寸幅四寸五分厚さ三寸五分のものを用ひ圍網に一個の重量百匁位の沈石を三尺距離に附く

漁法は漁夫十二三人にて出船し先づ函眼鏡を網圍中に下し水中を覗ひ十分魚の入たるを認むれば前垂網を引揚げ次に尻建揚網より魚捕りへ魚を逐込み攪網を以て抄ひ捕るなり

## 第五　坪網

坪網は關西及び瀬戸内地方にて多く用ゆる所の定設網にして地方に依り主として捕獲する魚の種類を異にし隨て其季節は勿論網の構造にも差異ありと雖要するに時に從ひ岸に沿ふて群來する浮遊魚をして網中に陷らしめて捕獲するの具なり今其一二を擧ぐ




坪網

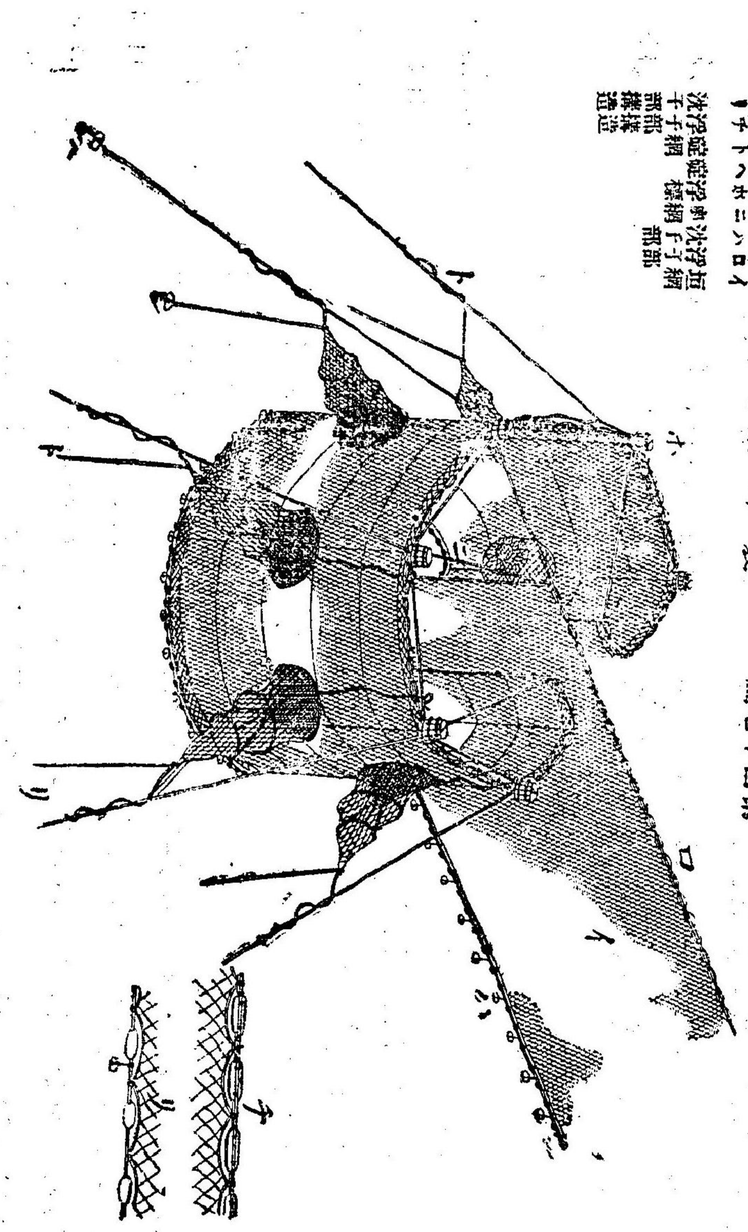
和泉國沿海に於て用ふる坪網は主として鯖を捕るものにして漁業の季節は四月より十一月までとし漁場は岸を距ること十二三町以内の處とす

網の構造は先づ一筋の麻繩長さ百四十五尋のものに碇を繫ぎ上には浮樽を附け岸より沖合に向て水面に張り亘す之を心繩と云ふ而して其心繩の先端より凡三十五尋許を退きたる處より藁繩網の網目一尋丈け十尋長さ八十尋なるを附け上には浮子下には沈子を附け以て水中に建切り之を垣網となす次に此藁繩網の先端を距ること五尋許の處に心繩と直角に丈け七尋一寸二分目の麻繩網を張り其兩端を再三曲折し末端を更に曲折し網圍の内部に向しめ略ぼ四角形となし沖の方と左右との三面は長さ十尋次の曲折の處は四尋内部へ向けたる處は二尋とし毎曲折の六隅の上層に浮樽を附け又此に網を繫き碇を沈め網の上端に浮子下端に沈子を附し幾んと水中に上面なき蚊帳を吊り下げたるが如き狀を爲す而して内部に曲折せる兩翼と藁繩網との間に各二尋許の餘地を存す是則魚をして網裏に入らしむべき門口とす又網の曲折せる六隅浮樽の下に徑一尺五寸許の孔を開き其孔の外側には別に細目の網囊を縫ひ着く是元來「コノシロ」の性たる物に觸るゝときは驚きて忽ち水面に浮ぶものなれば潮に伴ひ游ぎ來りて藁繩網に支へらるれば其網目を潛り逃るゝことを爲さず却て之を沿ふて沖に出でんとして終に門口より迷ひ入り四面の網に衝突して愈々驚き水面に浮び出て頻に脫路を索め其網隅の孔を見れば卽ち之より逃れんと欲し直ちに孔を潛りて竟に網囊中に陷るなり此網囊を牢と稱す

漁法は前記の手續を以て網の裝置全く了れば船を網側に繫ぎて魚の牢に入り來るを待ち其入るに隨ふて上口より攪網を入れて抄ひ捕るなり然れども多くは囊網の目に刺すものなるを以て牢を繰り揚げ罹りたる魚を捕り收むるなり此漁業は晝夜共に之を行ふを得べし船は一艘に漁夫一人若くは二人を要するのみ

## 第六　袋坪網

播磨國尾上清八の第三回内國勸業博覽會に出陳せる袋坪網と稱するは鯖（コノシロ）其他雜小魚を捕獲するものにして前者坪網と大體に於ては異なる所なきも囊網等に少しく改良を加へし所あり尙其構造を細說すれば垣網は藁繩製にして丈け七尋長




第七十四圖

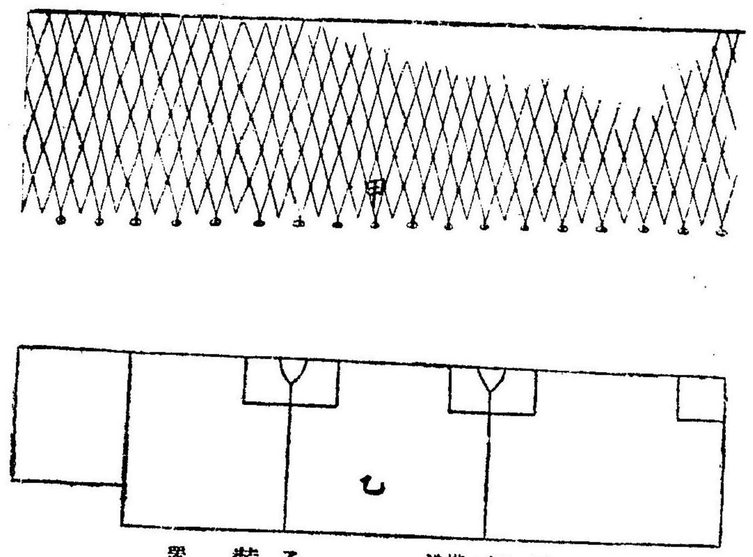
袋坪網



さ五十尋を竪目に用ひ之を肩縄及ひ足縄三十尋に縫ひ附け肩縄には桐の浮子三十個を附け足縄には小なる陶製の沈子を五寸間に一個づゝを附け尚ほ足縄に枝縄を設け大なる陶製の沈子三十個を副ふ圍網は麻絲製にして網目は五寸間に十五節網丈け十尋長さ百尋亦皆竪目に用ひ肩縄六十尋に縫ひ附け浮子二百四十個を附す網の下端は足縄七十尋に縫ひ附く即ち上端に比し十尋長し之に小なる陶製の沈子七百個を附け尚ほ二尺毎に一個づゝを副ふ此圍網に碇及び縄を用ひ六角形に装置し其曲折の處の上端に大なる浮樽一個づゝを附けて網を壁立せしめ曲折の處の壁外に漏斗形の嚢六個を附く此嚢は麻網にして長さ四尋周圍一尋半而して嚢中に又喉網を設く此喉網の設けば改良中の最要點とす嚢の尖端には皆錨網を繋ぎて動揺を防ぎ併せて嚢を緊張せしめ又別に一筋の網を出し之を圍網を張れる碇網に結ひ嚢を卸し又は之を擧ぐるに便す漁法は前者と概ね異なる所なく時々嚢を擧げ入りたる魚を捕獲するなり

## 第七　桝網

第百十八圖　桝網




甲　網の構造　　乙　裝置

桝網は前者坪網と同趣向のものにして構造裝置に於ても大差なしと雖其名を異にするを以て茲に其一を掲ぐ」

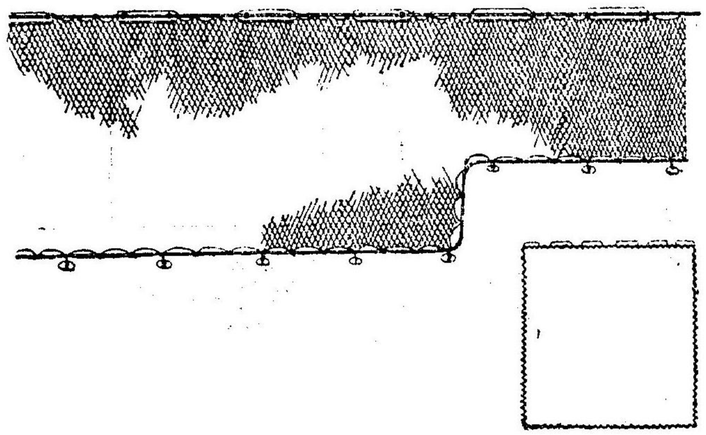
豐前地方に於ける桝網は主として鯖、鰹、鯛、烏賊、飛魚、鮒等を捕るものにして漁業の季節は陰曆十二月中旬に始め翌年六月中旬に終る漁場は海岸を距ること十町内外にして深さ五尋位海底泥砂界を爲すが如き處を良しとす

網の構造は桝網、牢網、垣網の三者を以て成り桝網は桝繩に垣網は心繩に附けて搆成す桝繩心繩とも麻製にして桝繩の長さは總計四十四尋其内十四尋は桝口にして他の三方は各十尋とし一隅毎に



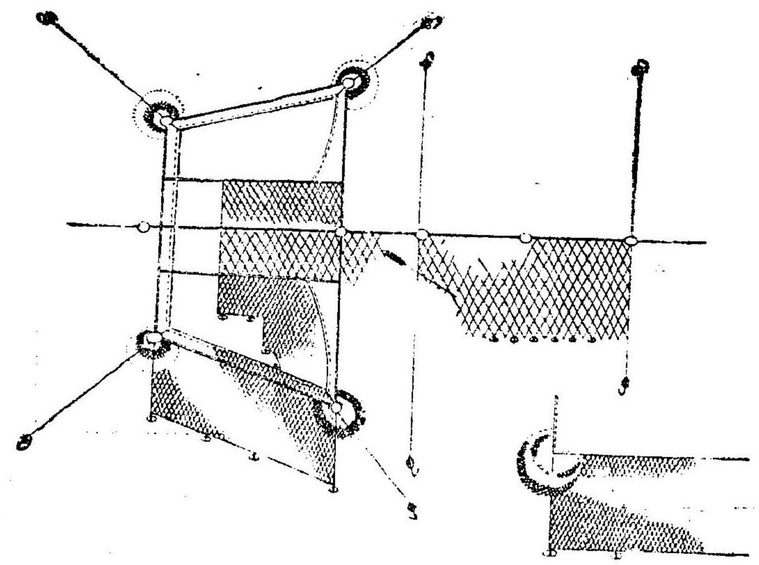


第百十九圖　桝網



浮樽を附く心繩は長さ四十四尋にして桝繩を張りたる後面より岸の方に向て一直線に張り亘し桝網の方を心繩元とし浮樽一個を附け岸の方の端は錨を以て碇置し又浮樽一個を附く之を錨元と云ふ又桝口十四尋の中央を心繩三十五尋の處に括り合せ是亦浮樽一個を附け尙ほ是より錨元までの間にも浮樽二個を附く浮樽は總計九個各一斗入位のものを用ふ心繩に附くる垣繩は長さ四十尋丈け六尋餘藁製にして竪目十一とす桝繩に附くる桝網は麻絲製にして長さ四十尋其左右後の三面に當る間は網丈け四尋四尺餘左右端五尋づゝは前面に折返す所にして丈け四尺を縮め四尋となす之を袖網と云ふ浮子は長一尺幅四寸厚さ一寸五分の

第百二十圖　桝網



ものを五寸間毎に附く沈子は桝網の四隅には重量五貫匁其外は一貫匁袖網には百匁の石を附く又桝網の四隅は網目十五を破り其外部へ牽網を附く其牽網は竪目六十あるを本網の竪目三十に横目百七十を本網の横目八十五に結ひ附け長八寸幅三寸厚一寸五分の浮子を附く之を裝置するには晝間潮流の平穩なる時を量り滿潮の流れを斜めに受くべき位置に先つ心繩桝繩を張り錨元心繩元及び桝網の四隅には長さ十五尋の網に重量五貫匁位の錨を繫きて碇置し若し風浪の虞あれば垣網の中央にも左右にも錨を沈め以て網を直立せしめ而し



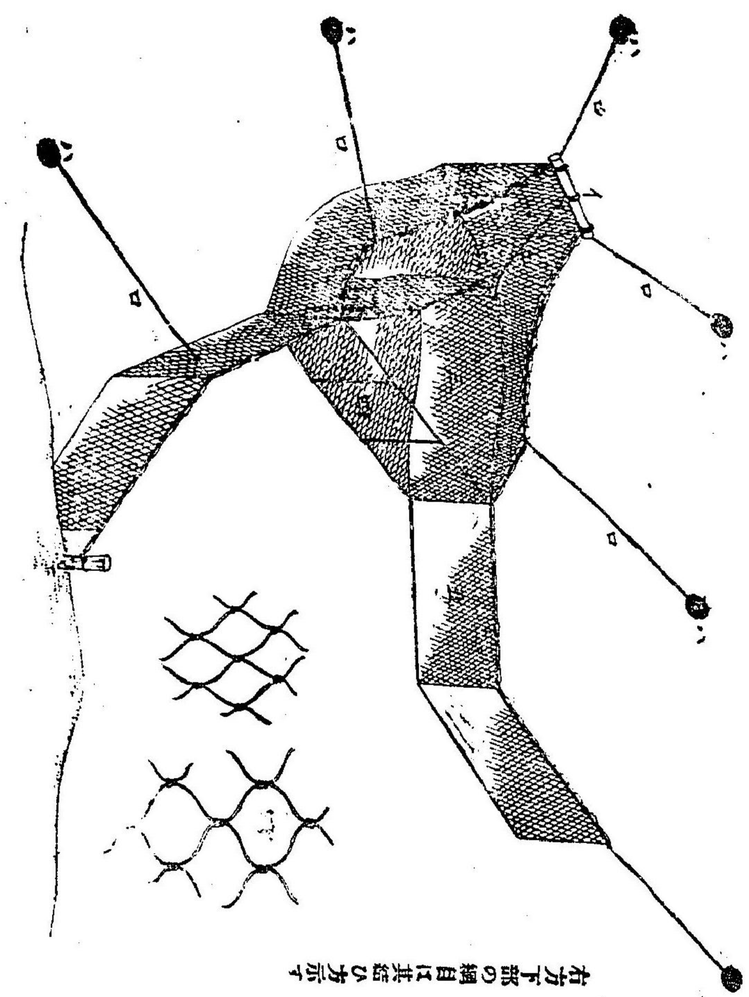
て桝繩に網を張り三尋間毎に肩繩を括り附く

漁法は朝夕兩度一艘の船に一人或は二人乘にて漕出し先づ桝繩の正中に至り潮上にある袖網の肩足繩を取り網目に罹りたる魚を捕りたる上網は元の如く沈め置き四隅の囊に陷りたる魚は擡網にて抄ひ或は鈎を以て捕獲するなり此際は船の動搖せざる爲め桝口より繩を船に挽き置くを常とす此網は常設漁具なれども漁獲減少するときは位置を移轉することあり

## 第八　瓢網

能登國鹿島郡深浦村に於ける瓢網は凡近岸に寄來る魚は種類を擇ばず捕獲するものなれども主として獲る處のものは「ハチメ」鰤(メナガ)にして烏賊、鱈等之に次ぐ漁業の季節は十月より翌年三月までの間とす之を設置するは海岸より僅に二三間乃至四五間を距りたる藻類の繁茂せる處とす

網の構造は局部を分ちて五となす卽ち圖中の(一)は魚捕(二)は胴網(三)は銚子口(四)は前垂(五)は「ハヒノ」と稱す都て麻絲製にして(一)魚捕は網目一尺間十二節二百目掛を



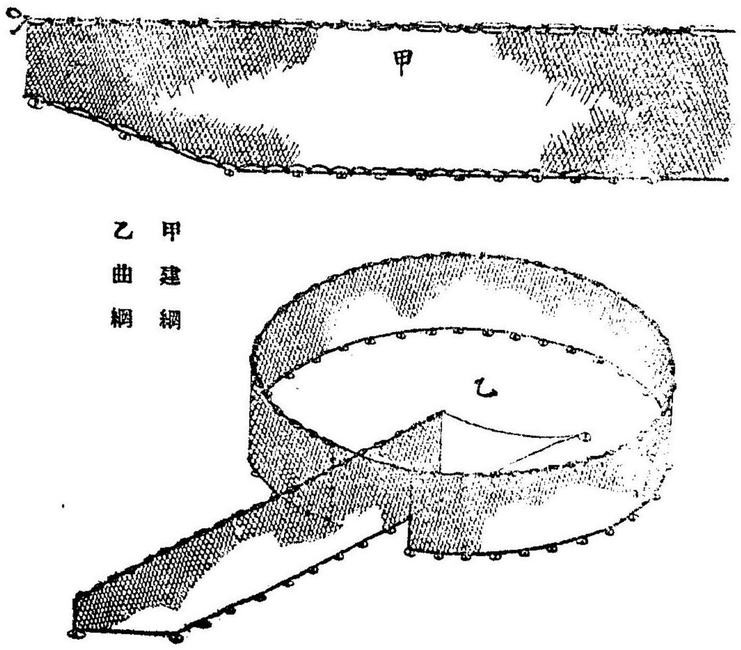

圖一十二瓢網



一反とし丈け五尋乃至六尋にして二割を縫縮め長さは上端卽ち圖中の(イ)なる基に接着する所を五尺とし(ニ)胴網は一尺間九節百三十目掛を以て一反とし丈けは六反繼ぎ長さ十尋を七尋に縫縮む(三)銚子口は網目同上にして丈け六反繼ぎ長さ五尋を三尋半に縫縮め長さ六尋を四尋に縫縮む(五)「ハヒノ」は網目同上にして丈け三反繼ぎ長さ十尋を七尋に縫縮む肩繩は總て藁製にして太さ周一寸餘乃至二寸弱浮子は桐丸木周七八寸なるを長さ五寸に切りたるものにして胴網に二十個銚子口に十個「ハヒノ」左右に十四個位を附く圖中(イ)は基と稱し杉木を用ふ太さは周一尺五六寸位長さ六尺位とす(ロ)の碇綱は藁製にて太さは周三寸位とし長さは海の深さ二丈に對し三丈乃至四丈を通常とす(ハ)の碇は空俵に小石を詰めたるものにて重量十貫匁內外とす(ニ)の網は通常の小繩を用ゆ(ホ)の銚子口の空隙卽ち魚入口は上層にて幅一尺位下底にて五六尺位とす此網は網足を海底に接着せしめて尙ほ若干尺地に敷く程に作る故に沈子の設けなし

漁法は船一艘に漁夫一人乃至二人乘にて先づ銚子口より基に引渡さる張繩を解き伸ばし次で前垂網の緣繩を引揚げ漸次起して魚捕まで繰詰め魚を捕獲し畢れ

第百二十二圖　烏賊曲網




ば又繩を張り縮め網を原形に復し幾回にても斯くの如くして捕獲するなり

## 第九　烏賊曲網

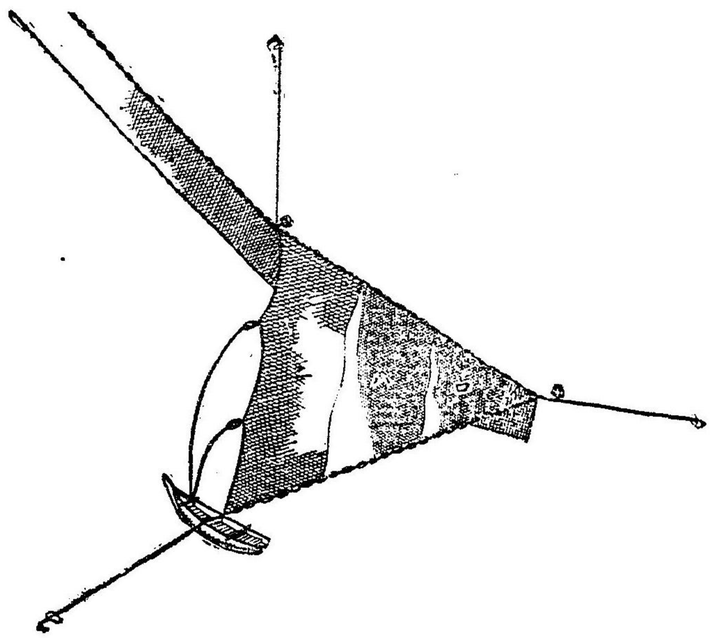
筑前地方に於ける烏賊曲網は甲烏賊を漁するものにして漁季は陰暦四月中旬に始まり六月初旬に終る漁場は海岸の接近にして深さ三四尋以内海底土砂相交り海草ある處を宜しとす

網の構造は肩繩百尋足繩百尋内五十尋は建出し網に五十尋は曲網に附く肩繩は二筋周圍一寸二分許足繩も亦二筋太さ肩繩に同じ之に絲網五割或は七割を増し作る建出し網は初めは丈け三尋曲網に近づくに從て六尋となる目合二寸八分曲網五十尋丈け六尋目合二寸浮子は長き八寸幅一寸二分厚さ八分のものを八寸距離に附け沈子は石を用ひ建始め建終り曲げ始め曲げ終りには各重量五斤其他は百匁のものを五十尋間に凡二十七八個を附く

漁法は漁船一艘に網一張を積み三人乘にて漁季の初めは晝間其後は日出或は黄昏より出漁し始め海岸を距る三四間位の處より沖へ建出し網を直線に張り其張先きより五尋位地方に寄り左右二尋位の距離を置き曲網を輪の如く張り廻し置けば烏賊の此曲網に迷ひ入り潮下なる網の開張したる處に漂ふを一晝夜二三回潮上に至り船に錨して一人は潮下なる曲網の足繩を取り二人は潮下なる曲網の肩足繩を取り繰揚げ凡六七分位繰揚げたる頃より潮下なる足繩を徐に繰揚るときは網の開きたる處に群集するを捕獲するなり

## 第十　鰹張揚網

網習二十三圖　鰹張揚網



豐後國南海部郡に於ては七八月の交鰹は近く海岸に沿ひ群集するを以て此時に當り張揚網を其線路に張り魚の自から網中に陷るを待て捕獲す網の構造は圖中(イ)は「ミソコ」と稱し網目七分位丈け五尋横幅六尋(ロ)は網目一寸二分位長さ五尋横幅十六尋(ハ)は網目二寸三分位長七尋横幅二十尋(ニ)は網目三寸三分位長五尋横幅二十五尋とし之を奥行十八尋網口十五尋の縁繩に縫ひ縮め浮子は桐製長六寸幅三寸厚さ一寸八分にして網の沖に向ふ片側には五寸距離に附く之を沖「アバ」と云ふ其一方の片側には二寸距離に附く之を中「アバ」と云ふ網口には二筋の曳綱を附け一筋は長さ十尋一筋は五尋其附け元には各重量一貫目許の石を括り附く垣網(ホ)は網目三寸三分位長さ五十尋丈けは本網に接する所四尋末に至り三尋となる浮子は三尺距離に附け之を地「アバ」と云ふ沈子は陶製にして五尺距離に附く之を裝置するには先づ垣網の一端を陸地の岸に繫ぎ沖に向て張り出し而して三處に錨を投ず其網の頭に附くべきものを沖錨と云ふ網の長さ三十尋とす網口の右端に附くへきものを向錨と云ふ卽ち陸地の方にあり網の長さ二十五尋とす網の左方にありて船に結び附くべきものを後錨と云ふ網は總長六十尋なれども錨元より船に結ぶまでの間大抵十五尋とす錨を投じ畢れば本網を卸し其頭を沖錨の網に右端を向錨の網に結び附け各大さ一斗五升入位の浮樽を附く網は總て棕櫚製とす

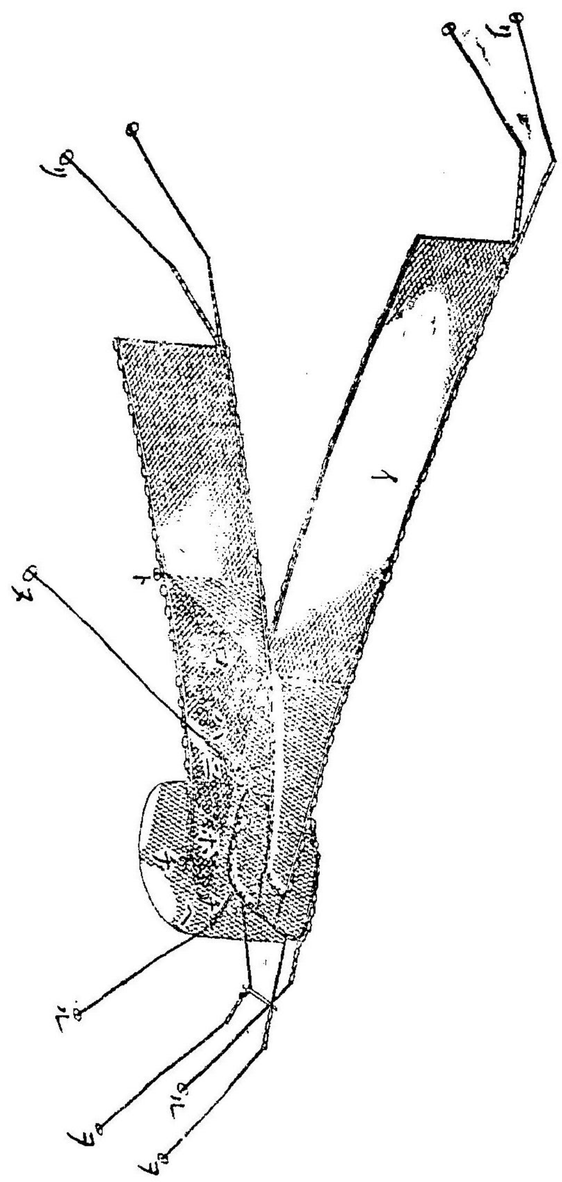
漁法は長二三間の漁船に漁夫二人乘組み船を網の左端に停め後錨の網を中梁に結び附け網の左側の縁繩の端を艫梁に結び附け網口の曳網二筋を船に取り以て魚の來るを待つ魚は地方に沿ひ來り垣網に路を遮られ繞りて本網に入り來るを

以て其十分に入りたるを測り豫め繰縮めある後錨の網を伸ばし曳網を手繰り船を進め網の左端より魚捕に向て魚を逐ひ入れ攪網にて抄ひ船中に捕入るゝなり其運用は尤迅速なるを要す此本網の頭と右側及び垣網とは更に位置を動かすことなく魚を捕り畢れば復た錨網を手繰りて船を開けば網は原との如く自から張るを以て再三再四此の如くして捕獲するなり

## 第十一　落し網

但馬國美含郡竹野村伊藤與四郎の第三回内國勸業博覽會に出品せる落し網と稱するは一名四つの天井網と呼び例年十月より翌年六月まで或は場所に依ては終年定設し凡何魚に限らず網目より大なるものは種類を擇ばず捕獲する漁具にして漁場は深さ十二尋より二十尋までの處とす

網の構造は袖網底網嚢網の三者を以て成る凡て麻絲網にして其袖網(イ)は八節目を用ひ右方は長さ九十尋左方は四十五尋幅は前端八尋二尺にして漸次に狹まり嚢網に接する處を四尋とし尚ほ嚢中に入るに隨て益々狹まる底網(ロ)より(ホ)に至るは略ぼ三角形を爲し(ロ)の前端幅最も廣く卽ち十五尋とす嚢口(ニ、ホの界)にて四尋嚢に入りて愈々狹し其長さ凡十八尋にして(ロ)の部長さ三尋四節目次の(ハ)は六

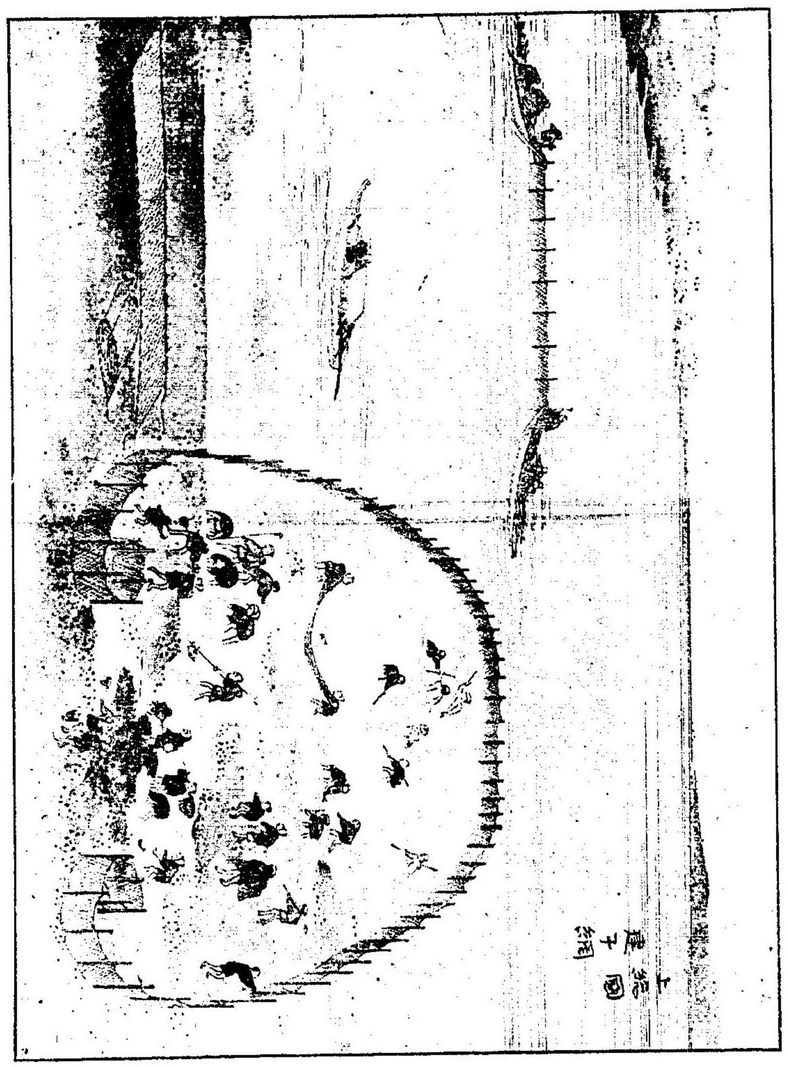



落網（網井天ノ部第十二回報）

尋六節目次の(ニ)は三尋八節目囊中の(ホ)は六尋八節目(ヘ)は落し囊と稱ふ八節目を用ふ幅七尋長さ十七尋一尺を以て作り底網の左右兩緣は袖網の下緣に綴合せ其前緣には重量一貫二百匁の石(ト)二個を附け囊中の底緣には五十匁の石(チ)二個を附く袖網の浮子は桐製圓形にして長さ凡三寸周圍九寸のもの一尺五寸毎に一個つゝ沈子は陶製にして二尺間毎に一個つゝを附く囊網の浮子も亦桐製長さ二寸五分乃至三寸周圍八寸其距離は五寸乃至一尺五寸とす又(リ)の沈石は重量各二十五貫匁乃至四十貫匁之を繫く綱の長さ四十尋(ヌ)は右の量各十貫匁綱の長さ三十尋(ル)は石の量各三十貫匁綱の長さ五十六尋(ヲ)は石の量各三十五貫匁綱の長さ五十六尋而して其綱の綱に接する處には竹を添へて浮泛力を助け且綱を緊張せしむ此網は囊網の底は底網よりも深く且袖網の末長く囊中に入りて自から喉網の用を爲し入たる魚の脱路を塞く是構思の見る可き所なり

漁法は海の深さ十二尋までの漁場なれば三人乘の漁船二艘夫より以上二十尋までの深さなれば三艘にて午前五時頃より正午頃と午後六時頃と又時としては夜間にも兩三回網代に至り囊網に陷りたる魚を捕獲すること他の建網の漁法に同

第十四圖



第十四圖　建網

じ

## 第十二　建干網

建干網は海岸淺遠にして潮の干滿著しき處に建設し滿潮に乘じ海岸に集まる處の魚を圍み退潮に際し去らんとするも網に支へられ逃るに路なからしめ以て之を捕獲するものにして魚の種類に於て擇ふ所なし所在之を行ふと雖今其一二を擧ぐ

### 一、上總國君津郡地方に於ける建干網

上總國君津郡地方內海に於ける建干網漁業季節は四月より十月までの間風なく浪靜なる日を卜し之を行ふ其網は麻絲製五寸間十四五目網丈け六尺長さ五六十間にして藁製の肩繩足繩を用ひ陶製の沈子を附け之を一枚とし數枚を連續し凡千間を以て一張とす

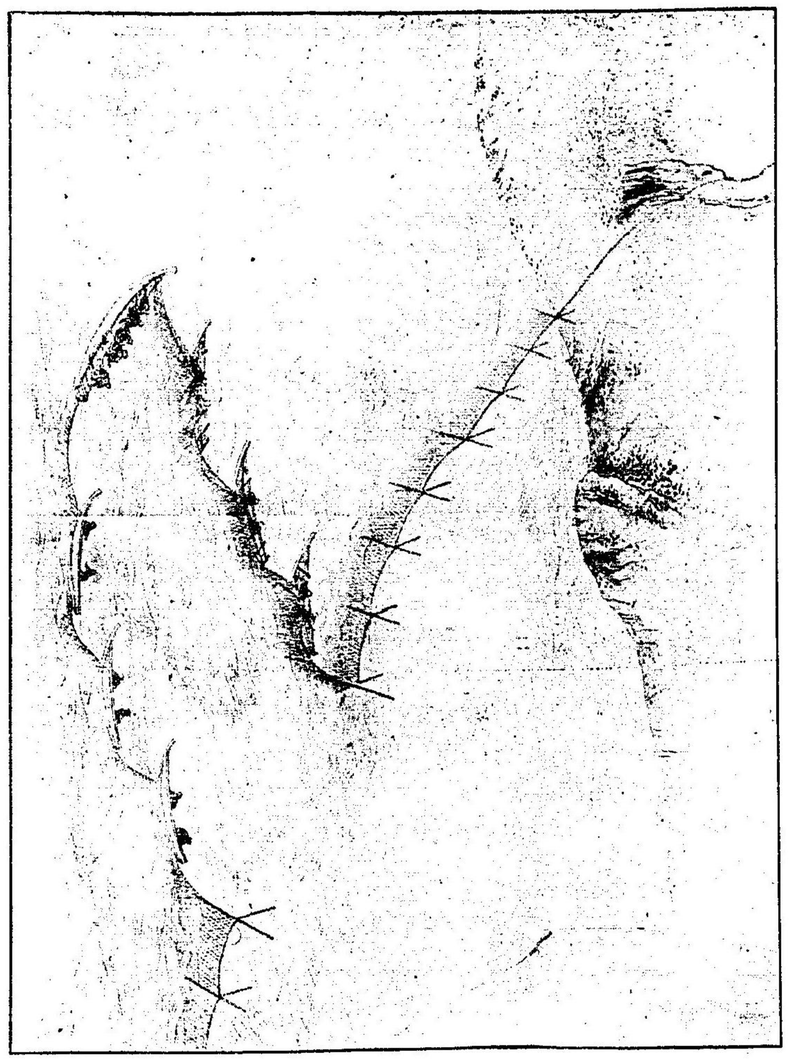
漁法は潮の未た滿たさるに先たち海岸を距る十四五町の處に漁船三艘を漕き出し網の中央より海に下し一艘の船は其處に繫ぎ他の二艘は左右に分れ滿潮に從

ひ網を下しつゝ岸に向て漕き進み方言「ツクボウ」と稱する太さ三四寸位の樫棒を四五間毎に建て之に網を掛け灣月狀に張廻し海岸を距る僅に二三町の處にまて至らしめ其兩端を渦狀に回旋せしめ魚の逃脫を防ぐ此の如く裝置すれば潮の退くに從ひ魚は沖合に出んとするも能はさるを以て全く干潮に至り徒歩して網圍中に入り或は抄網を用ひて抄ひ捕り或は叉類を以て突き捕り其他各種の手段を施して捕獲するなり

## 二、豐後國東國東郡岐部村に於ける建干網

豐後國東國東郡岐部村に於ける建干網の漁法は稍や巧を加へたるものなり其法漏斗落と云ふを設くるに在り是明治十三年の發明に係ると云ふ尙は之を細說せんに網は五寸に十四節丈け三尋長さ四百尋にして干潮の時適宜の處に網を置き石を以て其下部を壓し浮上を防き網の全體は別に砂石を覆ひ其兩端は海岸の樹木又は岩石に結び置き以て滿潮の時を待つ而して滿潮に至れば網を引揚け上部を浮はしめ豫め長さ凡二間許の竹數多を備へ置き之を二本つゝ叉形に結ひ數間を隔て海中に建て其中央の處に上端に別に長さ百尋の平網を結ひ附け沖の方即

第十六圖版



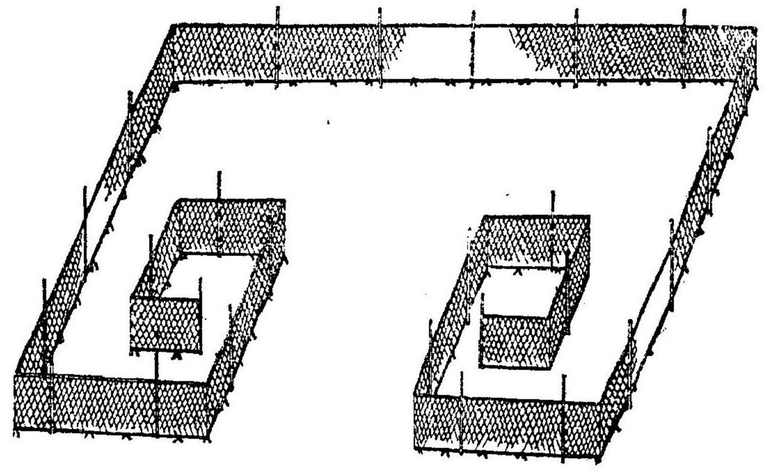
國ノ獨干建ルヶ於ニ村岐部郡東國東國後豐

ち水深き方位に向て海底に敷き置く之を漏斗落とす然して潮の將に退かんとする際漏斗落の兩側處々に船を寄せ錨を下し船中より其網の兩邊を取て少しく引揚げ建干網の中央漏斗落に接する處の上端を弛め少しく沈下せしめて潮水をして其上を退流せしむるときは建干網に遮られたる魚は悉く潮に從ひ脫出せんとして漏斗落の中に陷る爰に於て該網の前端より漸次船に繰揚げ魚の一處に集まるを待ち船中より之を捕獲するなり又滿潮の時に於て建干網の上端に浮子下端に沈子を附け海に投して群魚を圍み前記の如く漏斗落を裝置し舷を叩き一方より魚を驅逐し漏斗落に陷らしめて之を捕獲することあり

## 第十三　建網

肥後地方に於て建網と稱するは是亦前者建干網の一種にして漁業の季節は魚類に依て異なり卽ち六七月は鰆八月より翌年四月までは仔鱸、仔鰯、仔鰈、仔鱚等を多しとす網は長さ五百間目は五分より八分まで網丈け六尺とす之を裝置するには干潮を待ち漁夫五人にて第百二十五圖の如き形狀に張り竹を建つ其長さ五尺にし

第百二十五圖　建網



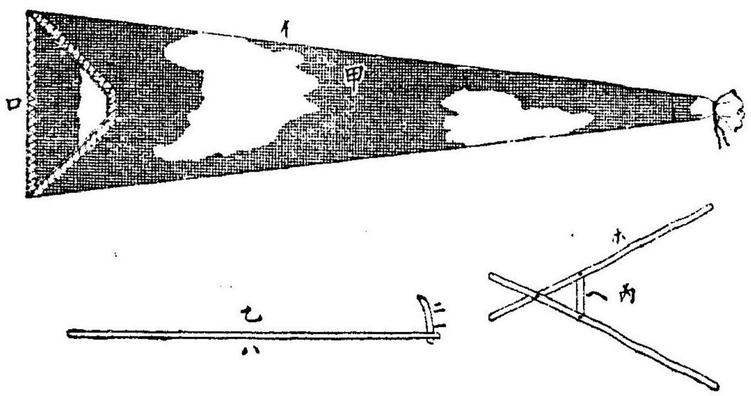
て四間毎に一本を立て百二十五本を以て一張とす之に網を張り廻し網裾には目串と稱し長さ二尺五寸の割竹の中央を折り之を三四尺距離に水底に挿し其網口は陸に向はしむ而して進潮に乘じ魚乘りて網圍に入り退潮に際し狼狽出んとすれども路なく遂に潮に殘され網に罹るを捕獲するなり

## 第十四　江張網

肥後國八代郡八代町に於て使用する江張網は白魚を漁するものにして他に之を用ゆる地なし八代町にては舊來此漁業は波瀬場(波瀬の事は叺の部に於て詳說すべし)に附屬せるものとし波瀬十株に江張船三十艘と定まれり故に波瀬を有せざるものは容易に此株を得る能はず今猶此慣行を確守し缺船あるにあらざれば決して定限を超えしめず然れども此株を買賣するは所有主の隨意たるに依り大抵代價七八圓より十四五圓までにて買賣することあり夫斯の如くなるを以て漁場も亦各々定處あり八代は球磨川々尻加々島と稱する所の上流凡百間餘の間にして水底深さ三尺以上一丈五六尺までとす鏡町は「モドウ」と稱する波瀬場の上流にして皆舊時よりの網代場なり水底砂にして鱠殘魚の放卵に適するが故に年々來聚を變ずることなく漁獲多しと云ふ季節は例年陰曆十一月十二日より翌



第百二十六圖　江張網




甲網
イ長六丈
ロ長一丈五尺

乙手鈎
ハ長一丈五尺
ニ長一尺
ホ寸

丙張木
ホ長二丈
ヘ長三尺

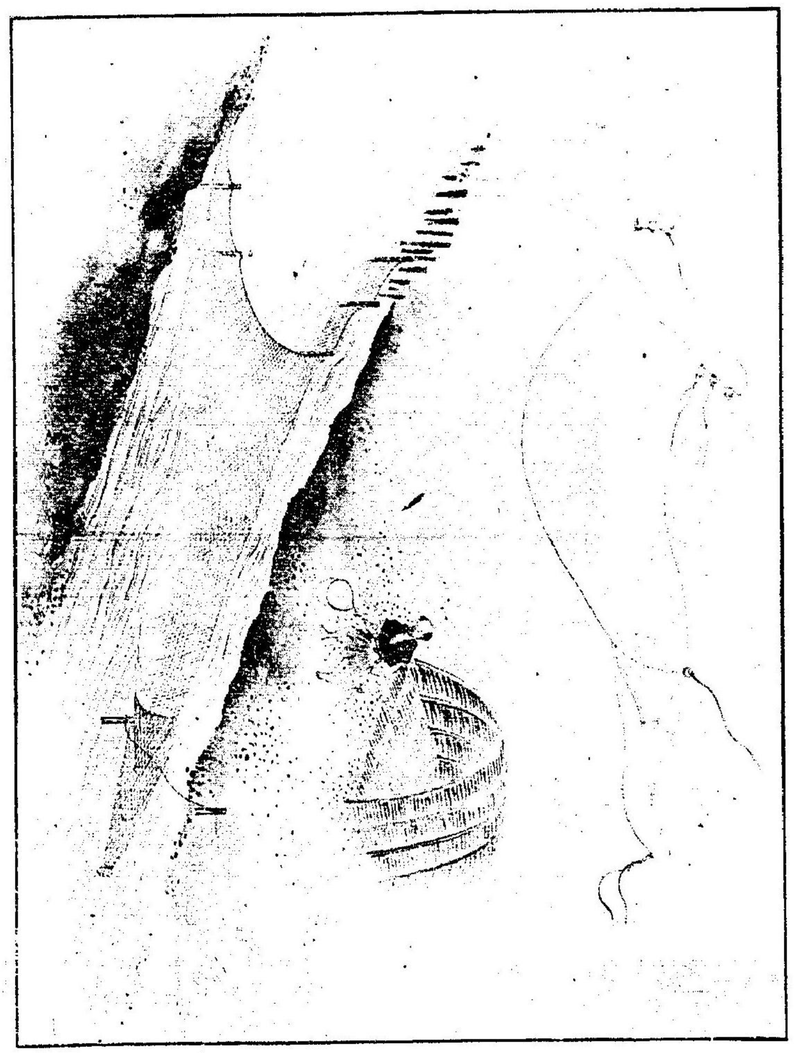
年三月三日までとす此漁は暗み潮及ひ干潮を嫌ふか故に毎月十日より二十一日まで凡十日間とす但だ正月二月は鮗殘魚孕鮞の時候なるを以て潮に關せず晝夜とも漁業を爲す網の構造：綟子七反を以て長さ六丈口幅一丈五尺とし上下の中心を差通にし兩脇は總て「ハスワ」を以て繼立長三角形に製し囊尻一間は別に麻布を繼ぎ之を張木に結び附け水中に建るものとす

漁法は漁船一艘に漁夫二人乘組み網二張を載せ漁場に漕出し豫め定めたる順番に從ひ各船駢列して網を建置す其船の駢列は漁場の廣狹に依て異なり八代にては一段十艘づゝにして三段に配置するを法とす網の建方は進潮には沖に向ひ退潮には之に反す凡て潮流に向て逆張するものとす魚を捕ふるには張木を動かすことなく艫より手鈎を下し囊網を引揚げ囊底を括りたる紐を解き魚を船中に收め畢れば復た底を括り水中に投じ幾回となく此の如くして漁獲するなり

## 第十五　袋網

石見國那賀郡濱田川周布川、三隅川等に使用する袋網は鰻、鯉、鮠、の類を捕ふる漁具

第十六圖説



圖の用途説明

にして漁期は四月頃より九月頃までとすれども就中秋彼岸の頃夜陰を以て最良とす此網は麻絲を以て編み長き嚢狀に製したるものにして漁法は水勢急ならざる淺瀨にて通水能き處を擇び川の中央六尺を殘し左右河岸より下流に向て斜に杭を打立小竹を以て柵を結び出水(大水にあらざる)の際豫て殘し置きたる川の中央に網を張ること圖の如くにし魚の下りて網の中に入りたるを捕獲するなり

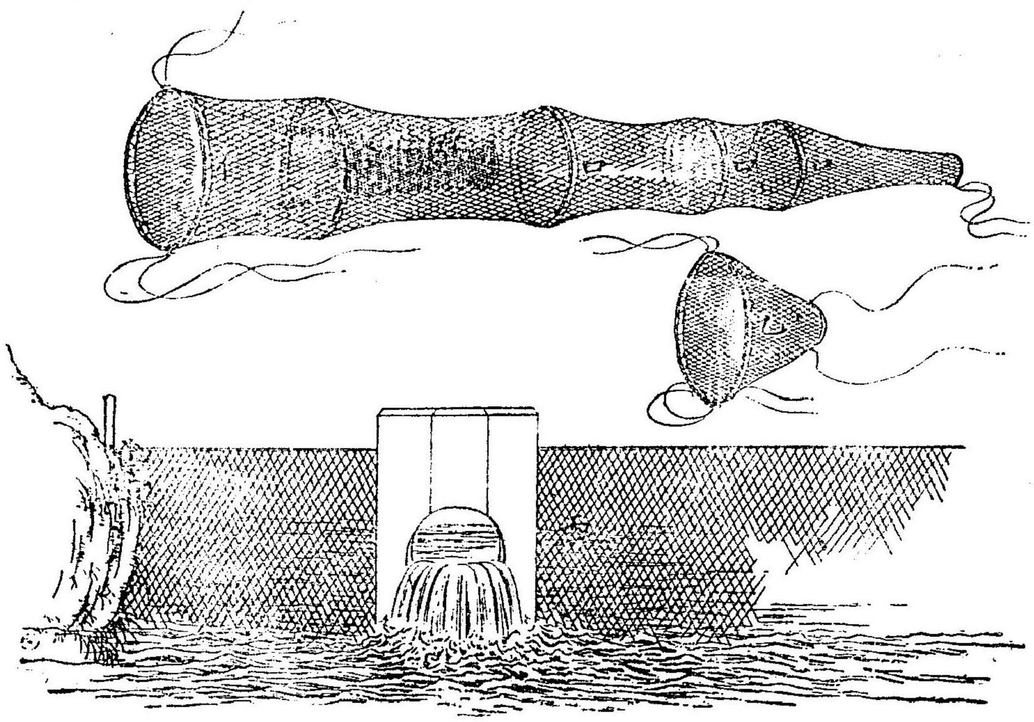
## 第十六　網　筌

網筌は淡水漁業に用ふるものにして所在之あり而して其大體の趣向は皆同じきも形狀に至ては地方の異なるに從て悉く差あり隨て其名稱同しからずと雖概括すれば凡て網筌なり固より小漁業にして記するに足るものなければ唯其二三を擧げて梗槩を知らしむ

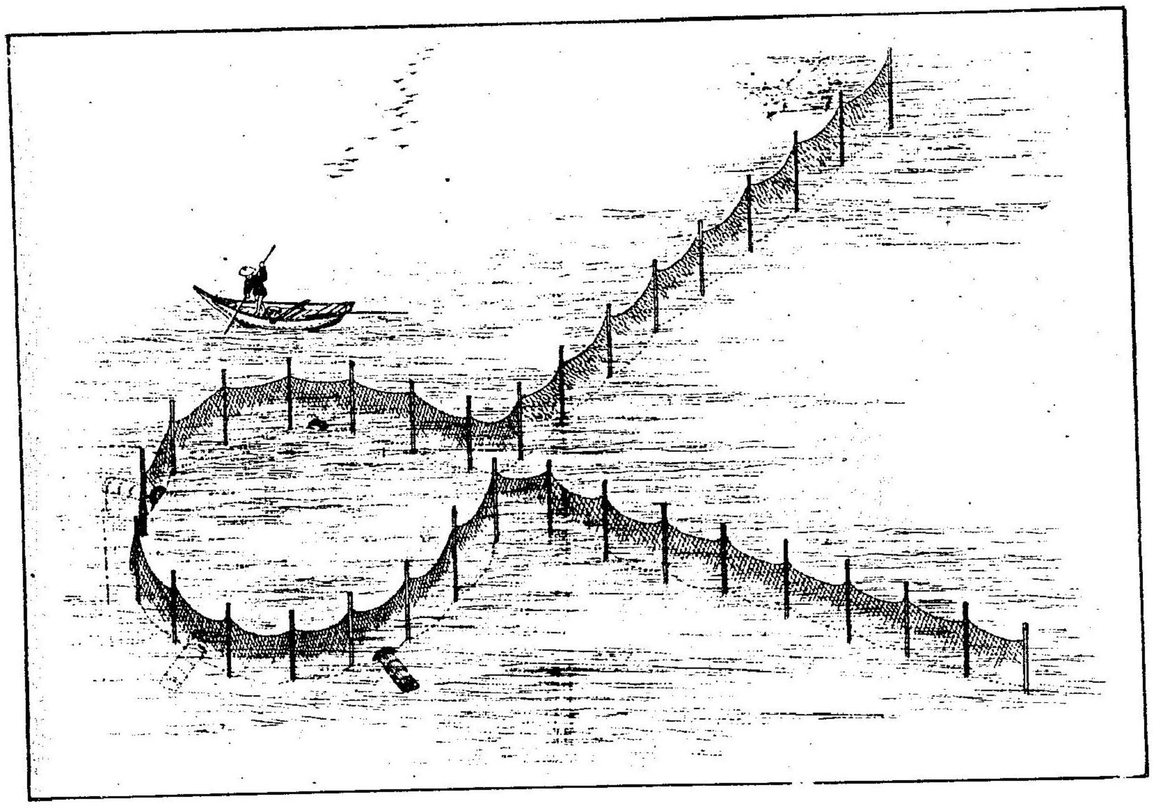
### 一、サカドウ

因幡國知頭川筋に用ふる「サカドウ」は深瀨に裝置し鮎(ウグヒ)を捕る漁具にして季節は五月頃より七月頃までとし晝夜使用すれども就中降雨に際し水の濁りたる時を

第百二十七圖　サカドウ網




第十八圖版



利根川の網代漁

宜しとす其構造は麻絲にて五分目の甕網を編み處々に竹製の輪を張る其輪は口の方より中央までを大にし夫より末端に至るに從ひ漸次縮少せしめ甕網も亦之に準す而して別に三分目に編み網口には輪を張りたる返り網を前の網中に挿し一たび網口に入りたる魚は復た脱するを得ざらしむ之を裝置するには川の中央へ堰板と稱し杉の五分板の中央に圓き孔を穿ちたるを立て其左右より櫻櫚繩を張り繩端を兩岸に繫き堰板の兩側の空處には麻絲一寸目の網を張り而して堰板に穿ちたる孔に網筌の口を結ひ附け置き之に陷りた魚を捕獲するなり

## 第十七　網代漁

利根川筋に於て網代漁と稱するは古來最も盛に行はれ沿岸の地到る處此業を營みしも元來此漁事たる水路に妨害多きを以て舊幕政の時一且禁止せり爲めに現今に於ても此等を爲すもの甚だ稀れにして獨り常陸國行方郡浮島に相對せる下總國香取郡霞ヶ浦及び同郡與田浦等に於て僅に遺存せるのみ是畢竟其地漁場廣濶にして他に障害なきに依る

此漁業は淺き處に於て河岸より河心に向け木竹等の杭を建て之に沿ふて左右の袖には藁繩網中央には麻絲網を連續したるを張る此麻絲網の部分を方言魚籠と云ふ魚籠の網裾には帚鉾狀に造りたる筌三四個つゝを附く斯く裝置すれば魚は游泳し來りて知らず識らず魚籠に入り竟に筌に陷り復た脫すること能はざるに至るを漁者朝夕に筌を揚げて魚を捕獲するなり漁季春秋二度あり獲る所は鯉、鮒鯰の諸魚とす

網代は漁場に依り廣狹一ならずと雖大抵周囲四十間より五十五六間に至り其藁繩網は長さ凡二十五六間幅八九間麻絲網は長さ凡三十間幅一間四尺建木は五六尺のものを用ふ

## 第七節　掩網類

掩網は魚類を水上より掩蔽被包して漁獲する漁具なり此種の網は概ね船上或は陸上より單獨にて使用し唯船を運らす所の水手を要するのみにして其數人にて網を使用するは僅に一二に過ぎず且十中の八九は世間最も多くある所の打網にして地方に依り「トウ網」「ナグ網」「マキ網」等の稱あるもの是なり之を除きて異狀なるものは僅々指を屈すべし

### 第一　打網

打網に鰤打網、鯉打網、鮎打網等の名ありと雖唯其魚の種類に依り網の大小と目の疎密を異にするのみにして形狀に至ては敢て大差あるにあらず卽ち其大體は圓錐形にして下端は圓濶に上端漸く細尖なるを常とすと雖中には鐘狀を爲せるもの往々之あり下端には大抵鉸狀を爲せる鉛製の沈子を連附し上端に浮子を須ひす然ども河川の水底石多き處にて用ふる網には圓形の沈子を用ひ恰も念珠の如き狀を爲さしむるものあり是鉸形なるときは石に支へられて網裾に空隙を生じ魚此より脫することあるを以て之を防ぐに在り其上端の尖頭をば龍頭（リウヅ）と稱し其龍頭より一條の繩を附く之を手繩と云ふ此龍頭に樞を設け以て手繩の附元をして回轉すべからしむるものあり斯く裝置せるものは手繩に撚の掛ること强からさるが爲め使用甚だ便なりとす此網に船打、陸打の二樣ありと雖是唯船上に在て

使用すると徒行して用ふるとの差あるのみ但だ陸打は通例小形にして手繩短く船打は稍や大にして手繩長きを用ふ共に網の下緣を一尺乃至二尺を內側に折り返し沈子二個位を隔て細繩にて吊り上げ網目に結ひ附け以て囊となす

之を使用する方法は先つ網を手繩より漸々繰りて左の手に持ち網の下緣より高さ三尺許を餘し尙ほ網幅の凡三分一を左の指に支へて左腕に懸け三分一は右の手にて握り餘る三分一は其儘垂下し其將に網を投せんとするや體の上部を少しく左に曲け又直ちに右の方に廻旋すると同時に網を投すれば手の握り方と沈子の重量とに依り網口廣かりて水中に沈降す是に掩はれたる魚は網に驚き一たび水面に浮び逃れんとするも能はざるを以て又沈んで網の下緣を潛り逃れんとす爰に於て靜に網を引寄すれば魚盡く囊に入るを以て徐々に引揚げ捕獲するなり而して之を引くに緩急適度を得ざる可からず何となれば若し引くこと急に過ぐれば網裾水底を離れて隙を生じ魚之より脫す緩なれば亦網を破り或は網目を潛りて脫するの患ひあればなり

通常船打は漁船一艘に網打一人艪押一人にて隨意に魚の栖處を覓め網を投するものなりと雖場合に依ては數艘或は數十艘集合し隊を成し二列に分れ雙方順番を定むと雖其交互するや間髮を容れず又暗夜にして唯魚の跳躍する音を聞くに止まるが如き場合には各船聯合し群魚を圓形に圍んで網を投ずることあり之を寄せ打と云ふ又河魚を漁するに其潛匿する場所を覘ひ或は河流を張網にて遮斷し魚の躊躇するを見て網を投じ捕獲することあり

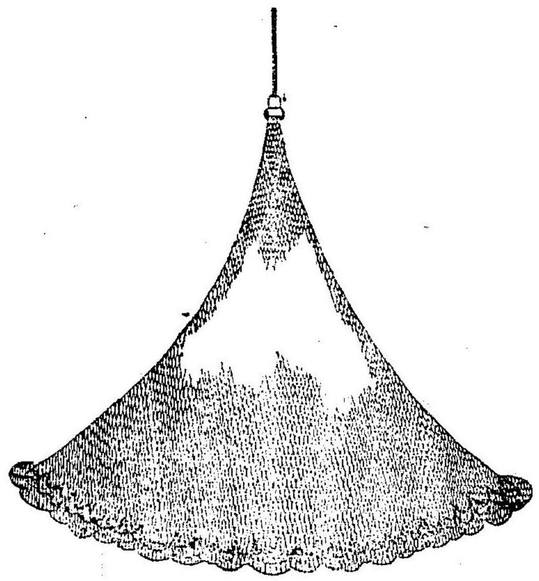
打網の使用は膂力を要し壯夫にあらざれば爲し難きか如き觀あれども必しも然らざるものあり膂力ある固より好しと雖單に膂力を以てするのみなるときは唯物を擲つと等しく網飛へとも結んで攤からざるを奈何せんか弱きは不可なれば無論なるも之を要するに腰と足との構へ其宜しきを得るにあり故に其力は網を支持するに足る以上は技に熟すれば容易に之を使用し得べし

抑打網は規模甚だ小く大洋の群魚を漁すべからざるは論なく其業も迂遠なるに似たりと雖之を製するに資金を要すること多からざると使用上輕便なるとに由り各地一般之を使用し利益亦少からず東京、大阪、其他都會の地にては遊覽者の爲めに雇はれて之を爲し魚の價よりも寧ろ雇錢に由て利する者頗る多しと雖九州

筑紫潟の如きは專ら職業として之を用ふること甚だ盛にして其技精練を極むるものあり隨て利潤大なりと云ふ該地漁者の此技を習ふ次第を聞くに先づ幼時家に在りて足の蹈み方を習ひ次に網を腕にし其構へ方を習ひ稍や長ずるに及んで腰の据りより網を打出すの模樣を習ひ全く備はりて之を船上に移し實地に熟せしめ數年を經て初めて一個の打網漁者となると云ふ其技に巧妙なる亦宜ならずや

打網は其大小固より一ならずと雖構造法は最初網目數目を設け漸次編み下し七位の網目に至り初めて隔度目數一個を增加し次九回は二目間に一目を增し十一回は三目間に次十三回は四目間に次十五回は五目間に各一目づゝを增加し周回目數八百乃至一千目に至りて成るも

第百二十八圖　打網



のを普通とす其增目の樣式は第百二十八圖に示すか如し

網目の結び方は概ね「カヒルマタ」とす是魚の網目を刺すもの往々之あるが故なり而して大抵柿澁を以て染む然れども染色を嫌ふものは白網にて使用するあり唯腐朽の速なるが故に稀には鷄卵の蛋白を塗抹するものあり其法總論中網保存法の項に述たるが如し又稀には淡藍色に染めて用ゆるものあり是れと同一色にして魚眼に觸れ易からざるを欲するが故なり

打網を以て漁する主たるものは鰯類、鯉、鮎、鱸等なりと雖尙ほ黑鯛、小蝦、鰺、鮒、鯛（タチゴ）の類をも漁すべく而して其捕獲の目的とする魚類に應じ網目に疏密ありと雖形狀に至ては皆一轍にして使用の方法も亦相同じ故に今唯一圖を揭げ各種に就ては圖せず漁法も亦稍や趣向に異なる所あるもののみを記し前に述たる所と同一なるものは凡て省略す唯大に面目を異する所のものは下に之を詳記す

## 一　鰯打網

鰯打網は河海共に所在之を使用し其漁法も大抵相同じと雖肥前國南高來郡島原町に於ける漁法は少しく普通に異なる所あり其季節は陰曆十月より翌年三月ま

でにして網の構造は上部は最も良好なる所の細絲を用ひ下に至るに及び糸を太くす網目は八分乃至一寸二三分まで鰯の成長の度に應ず目數は上部百二十より始め漸に至り五百乃至七百に止む沈子は一個の重量十二匁より十六匁までにして其數網の大小に由り增減ありと雖大抵百十個乃至百八十個とす手繩は麻三つ綯長さ五尋乃至七八尋とし別に五升入位の浮樽を具ふ

漁法は漁船八艘乃至十艘を一組とし一艘毎に網三張を備へ暗夜に出漁し海岸を距る凡十五町以上深さ十尋以内海底沙或は泥の處を擇び各船圓形に排列し海水の閃くと鰯の跳る音とに由り機を察し合圖を爲して第一番船より順次網を投す而して其網は普通の即時に引揚くるが如くせす手繩の末に浮樽を繫ぎ海面に泛べ網は其儘放置し船は更に内部に進み圍みを狹め又網を投して其儘放置し尙又進んで圍みを狹むれば船と船と殆んど接近す依て復た各船網を投すること前の如くすれば船に備ふる所の三張の網皆投し畢る爰に於て浮樽を取り網を擧げ捕獲するなり是蓋し鰯の性たる四面を圍み網を投すれば其音に驚き逃れんとして其外部に出ることを爲さす却て圍の中央に集合するものなるを以て斯の如くするを利ありとするなり此法は島原湊町の漁業者梅村莊衛平野孫平治の創意にして明治七年より行ふ所なりと云ふ

肥後國沿海に於ける鰯漁に石打と稱することあり石礫を五尺四方位に積み竹を建てゝ目標とす之を石塚と稱す日を經れば鰯來りて石に聚るを以て時々打網を投して捕獲するなり網の構造及び其使用上に於ては普通に異なる所なし此石塚は不知火海に最も多く行はれ各自祖先傳來の專用漁場にして一切他人の漁事を爲すを許さす愛重すること恰も農家の耕地に於けるが如し時としては賣買することありと云ふ

## 二　鯉打網

鯉打網漁業に於て各地大なる差異あるものを見す網目大抵八分より一寸四分までにして絲は稍や太きを用ふ夏期に在ては河川中水深く流平かにして杙の如きものゝ多く在る所の邊側を覗ひ網を投すること普通に異なるなし冬期に至れば鯉は沿川林藪等の下網の入る可からさる處に潛伏するを以て此時に於ては數艘の船にて左右に分れ鯉の潛伏すべき處を擇び竹棹又は其他のものを用ひて魚を

驅出し而して鵜繩と稱し一條の繩に鷗鷺或は鴉の羽を挿み結ひ付たるものを水中に下し二船にて其場を取り漸々淺所に向き曳き廻せは鵜繩の水中に動搖するに恐怖し魚は其逐はるゝ所の淺處に抵る此時直ちに網を投して之を覆ひ或は網に纏終せしめて船中に引揚け或は鐵叉を用ひ突て捕獲するなり

## 三　鮎打網

鮎打網漁業は河流の深淺と季節とに由り其方法に差あり網目も季節に依て異なり大抵最も細きもの二分五厘位より疎きもの六分に至る夏季に在て水深き河川に漁するには船を用ひ深くして流れ緩なる處を擇び水に沂りつゝ網を使用し或は數艘聯合して合せ打をなすことあり淺き河川に於ては徒行して水に入り其淺湍に魚の聚るを見て網を投す鮎の性上流に向て脫せんとし且斯かる淺湍にては網を押流さるゝの恐れあれば網を下せば直ちに兩手を以て上流の網裾を壓へ手に觸るゝ魚は手つから之を捕へ然る後靜に網を曳き猶網中に在る魚をして囊に陷らしめて捕獲す此漁は晝夜とも爲す可しと雖晝よりも夜に利あり就中太陽の出沒の時に於て漁獲多しとす又鵜繩を用ふるものあり其法前者鯉打に用ふるものに同しく唯徒行して使用するを異なりとするのみ又一種鮎「カシ網」と稱するあり網の形狀は通常の打網に異ならされとも上端に於ては目を五寸間に三つとし漸次裾に下るに隨ひ目を細かにし裾囊に至て五寸間に三十目とす之を使用するには先づ柴篠等を以て河流を横斷し魚の下るを防ぎ其上に網數張を投じ上流に竿を建て竿頭に手繩を繫ぎ龍頭の纔に水面に露はるゝを度とす斯く裝置して一夜間浸し置くときは魚は流に從ふて下り柴篠等に遮られ進むことを得ず躊躇逡巡するの間知らず識らず網圍中に入り驚き恐れて尙ほ水に溯らんとして復た網に觸れ狼狽して水底を潛らんとし終に裾囊に陷る之を翌朝引揚げ捕獲するなり專ら晩秋に於て之を爲す此漁は捕獲少からざれども其河流を横斷するは卽ち築の法にして漁利を壟斷するものなれば不良の漁法と謂ふ可し

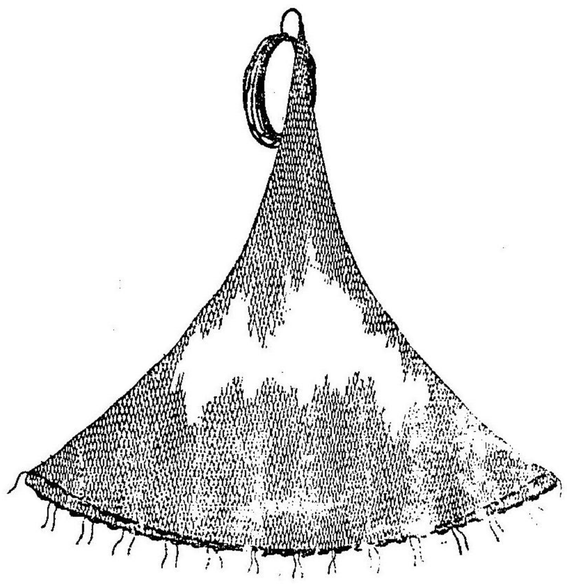
## 四　ハダラ打網

肥後國宇土郡網田村に於ける「ハダラ」打網は方言「ハダラ」と稱し鯏の稚兒に似たる一種の魚を漁するものにして同縣下に於ても網田村の外未だ他に使用する所あるを聞かず此ハダラの性たる網を被ふれば直ちに衝て水面に出るが故に普通の

網の製にては魚の網目に漏るゝ患あり又海底網の達せざる處にては使用し難く漁法頗る不便なるを以て同村曾方林平と云ふ者工夫を下し此網を創製せり其形狀は普通の打網の如くなれども長さ五寸半の内裾の方三尋半を大目に結ぶ而して絲の太さを增さず是網の水に抗抵する力を減し其沈下を急ならしめんが爲めなり其上二尋間は目を細くし五寸間二十節とす是魚の脫漏を防ぐに在り沈子の量は之を撒下して魚の海面に上昇するとき網の龍頭は已に水中に入り然も網裾は海底に接着せざるを度とす蓋し其趣向網は海底に接着せざるが故に沈子の重力にて初め撒したる時廣がりたる網裾速に狹まり一たび上昇したる魚は翻て下部に退却するに暇なく以て網の上部に於て恰も魚を包むが如くならしむるに在り故に網を下して其沈下尙ほ緩なりと認むるときは竿を取て龍頭を突き込み手繩を繰りて網裾を寄することあり斯かる異製たるを以て之を使用するには最も老練の漁者に非ざれば能はずと云ふ方俗之を幽靈網と呼ぶ腰以下殺き足地に達せざること畫けゝ幽鬼に似たるを以てなり

## 第二　卸網

此網も肥後國に用ふるものにして主として鯉鮒魚仔鱸等を河川に漁す網の形狀打網に異ならざれども其製頗る大にして蓋し河漁に用ふる網の最たるものなり

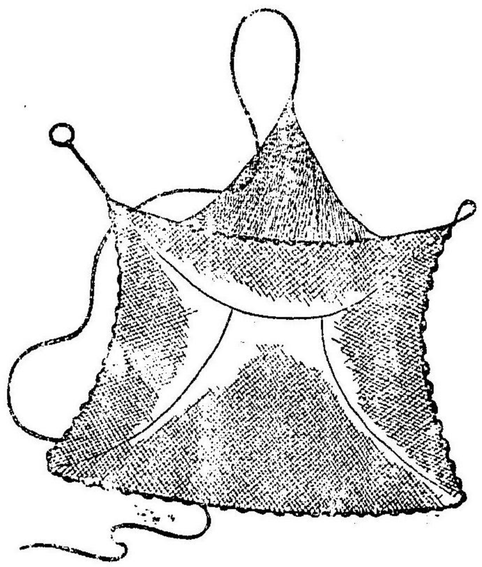


第百三十九圖　卸網

網の長さ十六尋裾一周廻九十尋あり目は八分龍頭の處一寸五分沈子は一個の重量十一匁のもの九百個を附し手繩の長さは五十尋とす網絲は疊絲位のものを用ふ之を使用するには船六艘每船二人乘にして内一艘を本船と定め漁事一般の指揮を掌らしむること猶海漁の船頭船の如し漁場は急流ならざる深淵を擇み先づ五艘の漁船は網を卸すべき場處を圍みて配置を爲し各々錨を投す爰に於て本船は網の裾を各船に配布すれば一人は錨綱を手繰り一人は網を張りつゝ次第に進み全く圍形を爲したるとき一時に水底に沈下せしむ網の沈むや直ち

に各船は本船に就きて手綱を執り本船は龍頭を持ち神速に網を引揚げ裾囊に陷りたる魚を捕獲するなり此漁は使用の速かにして且靜肅なるを要す其大漁たるときは一回に數十貫匁の魚を獲ることあれども若し使用宜しきを得ざるときは一尾をも得ざることありと云ふ

第三百三十四圖　流網

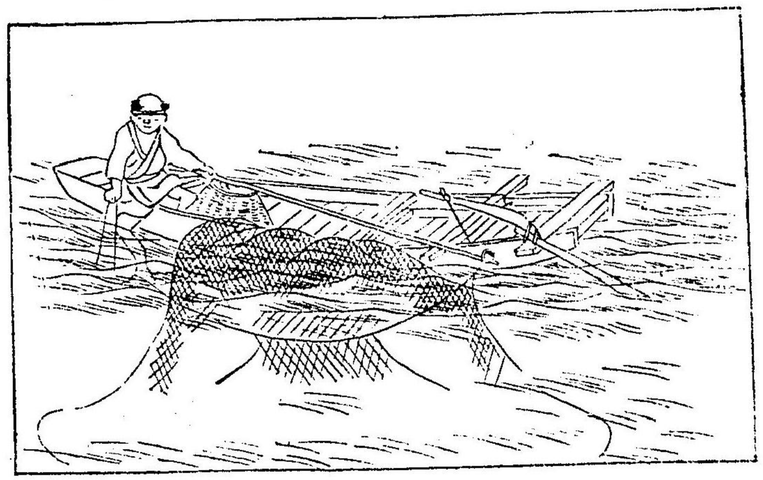


漁業の季節は鱸鱒は二三月頃鮭は十月頃とし鯉其他の諸魚は敢て季節なしと雖大抵十一月以降冬季は休業す

## 第三　流し網

下總國河川に於て使用する流し網と稱するは掩網の種類にして彼の刺網類中の流し網とは全く異なり方俗一に「バカ」網と稱ふ主として鮭鱒及び鯉鱸を漁し猶其他の雜魚をも捕獲する具にして網は太き麻絲の二縷撚を以て作る其構造略ほ打網に類似し打網に比すれば稍や大なり長さ一丈五六尺にして網はの周廻ほ凡十間より十六間許に至る網目は曲尺一尺六寸若くは二尺許の間に三十六目を以て通常とす龍頭には長さ一丈餘の手綱を附し網裾には鐵製にして長さ三寸許の沈子八十四個を附し其總重量凡一貫匁許とす又網裾の一方に一筋の綱を附く之流を脈綱と云ふ而して脈綱と反對の位置に又一網を脈綱と云ふ而して脈綱と反對の位置に又一網筋の綱を附け其末端に鐵製の環を附く使

第三百三十一圖



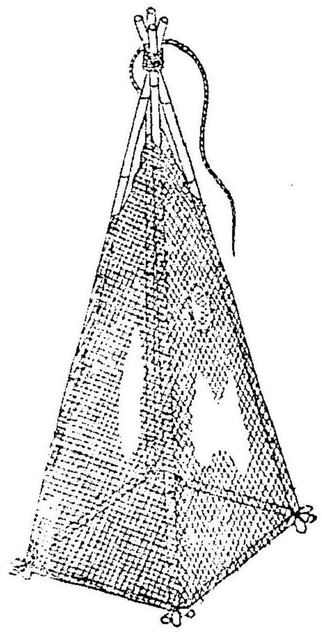
漁法は先づ船を河流に横たへ漁者一人船の舳用に腰を掛け而して網の半ばを水中に下し殘る圖半ばを船舷に懸け又網裾の一方より出せる脈綱を漁者の右足に懸け他の一方より出せる綱

端の鐵環を豫め船の艫舷に備へたる鈎に引懸け右手に擢を操り船を斗かに流す
ときは網は沈子の重力と水勢の作用とに依り恰も帆を張りたるが如き狀を爲す
斯くて魚の來るを待つに魚下流より泝り來り網に觸るれは忽ち脈繩に感應する
を以て漁者は急に棹を取り其頭にて艫舷の鐵環を鈎より脫落せしめ之と齊しく
足に懸けたる脈繩を脫すれば船舷に掛けたる部分の片網は忽ち水中に沈下して
魚を網裏に包む其狀殆んと打網を下したるに同じ然る後網を引揚げ入りたる魚
を捕獲するなり

## 第四　提燈網

下總國印幡沼、手賀沼、長沼及び利根沿川に於て多く此網を使用す此網に二樣あり
一を鰻夏網と云ひ一を鯉鮒「ヲシ」網と云ふ
鰻夏網を使用するを方言「ダッバ」漁と稱し七月炎暑の候より始め九月中に終る網
の形狀は打網に類似し長さ六尺許網裾の直徑三尺七寸許網目は上邊に疎にして
中邊は密にし四分許に製す而して之を四本の竹を以て組みたる籠に結び附け網

第百三十二圖　鰻夏網



頭に附けたる手繩方言「タルナワ」を伸縮して以て網の張弛を自在ならしむ
漁法は漁者一人にて或は船上より或は陸上よりし共に便宜に從ひ先づ水中鰻の潛在すべき處を考へ棹を以て水底を衝けば鰻は驚き一旦泥中より浮み出逃れて更に他の處を覓めて泥中に潛入す潛入すれば必ず水濁るが故に漁者は其水の濁れる處を窺ひ網の手繩を緊縮して網を張り以て上より覆ひ伏せ然して手繩を伸せは網は弛まりて籠の側面より長く一方へ膨出し殆んど籠の如き狀を爲す此網の上部の一面には豫め孔を設けあるを以て其

第百三十三圖　メナワ

孔より方言「ワナメ」と稱し頭部を薄き鐵板にて作り之に篠竹の柄を付けたるものを挿入れ其頭部を以て鰻の潜める處を衝て逐ひ出し其浮ぶを見れば網の弛みて嚢狀をなせる處に逐入れ引揚げ之を捕獲するなり

「ヲシ」網漁業は一に覆筌漁と稱へ夏月霖雨に際し利根の河水暴漲し濁水兩涯の水草を浸すとき鯉、鮒、鯰等の諸魚淺水の處に來り兼葭の間に栖息し漸く退水するに臨み潴水の水藻中に潜伏するものを捕ふる漁具たり此網の構造も大抵鰻夏網と同一にして長さは五尺五寸水裾の徑三尺五寸網目は大凡九分とす但た鰻夏網は簍の下口方形なるを多しとすれども「ヲシ網」は總て下口を圓形に作れるの差ありとす

第百三十四圖　ヲシ網

此漁法も鰻夏網と略ほ同一にして初め棹を以て潜める魚を衝くときは魚は驚き小泡を噴出しながら疾走して更に他の處に潜む漁夫は其泡の止まる處を認めて網を下し果して魚の入りたるや否を試み魚の入りたるときは裸體にて水中に入り網を弛めて一方に嚢狀を爲さしめ此中へ逐入れ捕獲すること亦鰻夏網に同じ

## 第八節　抄網類

抄網は木竹若くは金屬を以て網の周邊を支持し底は嚢狀をなさしめ水中の魚を抄ひ揚くる具にして網罟中最も構造の簡單なるものなり其網口圓形のものあり三角形のものあり東國にては圓形のものを「タマ」と云ひ地方に依ては「タモ」と云ふ三角形のものは一般「サデ」と云ふを普通とすれとも九州にては圓形のものも共に「タブ」と稱ふ今茲には圓形なるを攪網に作り三角形なるを纏網に作る蓋し纏の字義本と網に同じ故に網の字を添ふるは重復に似たりと雖通俗之を用ふるもの多きを以て敢て省かす

此種の網は凡全國中到る處として之を用ひざるはなく其之を用ふるは既に網を以て魚群を圍み繰り寄せたるとき其魚を抄ひ捕る等副漁具として使用するを多

しとすれども亦之を以て主用漁具とする場合も少からす之を主用漁具とするに際しては種々の名稱を付すと雖今一々名稱に依て種別するの必要なきを以て本編には之を概括して記載し其副漁具として使用するものは都て省略す

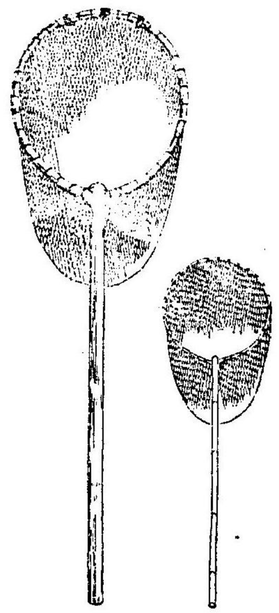
撬網繰網を主用漁具とする場合に於て之を船上より使用するあり陸上よりするあり或は水中を徒行して用ふるあり其使用の方法に於ても豫め柄を備へ其柄を把持して抄ふてふ恰も杓を以て物を汲むが如くするものあり或は香餌を水面に撒布し若くは火を焚て魚を誘聚して後抄ひ捕るあり或は先づ網を下し魚の之に入るを待ち若くは振繩を以て驅逐し網に入らしめて抄ひ捕るあり是稍や敷網と趣を同ふすと雖敷網は之を水底に開張するに全體恰も帛袱(フロシキ)を攤けたるが如くならしめ運用必しも周邊木竹等の力にのみ賴らされども抄網に在ては必す周邊附くる所の物に倚て網口を開張せしむるを異なりとす

抄網の運用は柄を以てするを多しとすれども稀には柄を附せすして網を以て上下し抄ひ捕ふるものあり又一種網口に爬爪を具へたるものあり貝類を抄ひ捕るには多く之を用ひ專ら柄を把て運用するものなり

## 第一　撬網

撬網の周邊は松樹等の梢杪に左右相對して枝を出せるものを擇び其中心を切り去り兩枝を撓めて雙方より抱き合せて之を括り輪形となし之に網を結ひ付け樹幹を柄となすものあり其輪形は多く正圓にすれども中には稍や橢圓なるものあり大洋に出て鰯等の類を抄ひ捕るには多く之を用ふ又篠竹若くは篠或は篠蔓の類若くは鐵線等を以て輪となし別に竹或は木を以て柄を附するあり鮎又は小鰕の類を抄ひ捕ふるには多く之を用ふ今其一を圖し小異あるものは一々圖出せす

第百三十五圖　撬網



### 一、鰯抄網

鰯を捕るを目的とする漁具は規模大なる曳網、敷網、旋網等ありと雖鰹を漁するに

當りては其餌料に供する活鰯の需用多し故に鰹釣の爲め出漁の際には船中必ず此網を備へ海上鰯の群あるを認むれば之を以て抄ひ捕るなり之を張擡（ハリダイ）と稱す其大小地方に依て差異あれども今安房國に於て使用するものに就て之を記さんに周邊は前に記せる如く松木にて作り徑凡三尺二三寸網は麻絲を用ひ網目上端に一二寸下るに從ひ漸く細かくし囊底に近づけば四分目とす深さ四尺五寸許にし槲樹皮の澁液にて染む柄の長さ八尺許とす之を使用するには魚群を認め柄を把て網を挿入れ抄ひ揚るまでにて別段なる手術なしと雖方言餌床と稱し大魚の鰯を食はんとして四方より取圍むに際し鰯は恐れて偏に水面にのみ浮び群圍し他に散逸せざるを以て斯かる場合には一抄して鰯は網に滿ち數抄に及ぶことあり抄ひ捕りたる鰯は直ちに船底に設けある籔中に放ち生活せしめ以て鰹の釣餌に供するなり

## 二、豐後國南海部郡に於ける鰯抄網

豐後國南海部郡宮野浦邊にては鰯の外尚ほ小鯖、鰹等を捕るに專用するあり其網の構造は網口の徑三尺許囊の深さ三尺五寸乃至四尺にして網目五百許を立て周邊は徑三分許の鐵製の輪を附し杉木を柄となす其網は淡藍色に染めて用ふ之を使用する季節は鰯、鰹、小鯖は三月より五月まで鰹は八月より九月の間にして沖合に魚群の寄り來るを見れば長さ三間位の小船に漁夫二三人乘組み其處に至り鰯鯖等の肉を敲き潰したるものを海面に撒布し其下層に網を入れ魚の餌を食はんとして集まるを下より抄ひ揚げ捕獲するなり

## 三、仔鯖（コハダ）抄網

駿河國有渡郡村松村邊に於ては冬季十二月頃より翌年三月中旬までの間仔鯖を捕るに用ふ其構造は大約前記安房の鰯張網に同しく網口の徑二尺七八寸網目五分位囊の深さ三尺位に作る其漁法は西風烈しく波濤山を爲すの時を機とし暗夜に乘じ一艘の漁船に漁夫四五人乘組み網二張乃至三張を備へ二人は櫓を漕き廻りて魚の所在を索め一人は篝火を焚きて海面を照らし他は擡網を執て魚の集まるを待つ「コハダ」は火光の水面を照すを見て忽ち紛挐麕集するを以て更に一層火勢を熾にすれば魚は愈々激刺として水面に跳躍するに至る爰に於て網を下し幾回にても抄ひ捕るなり而して此間魚走るときは船も走せながら抄ひ魚止まれば

船も亦止まり凡そ緩急其度を失せざるを要す然れども幾はくもなくして魚は散逸するものなるを以て此時篝火を滅し待つこと少時にして再び火を照せば魚復た群集すること前の如くなるを以て同一の手續を以て抄ひ捕るなり此漁法を「仔鰯火振り」と稱す

## 四、玉筋魚抄網

越前國丹生郡米ノ浦に於ては玉筋魚を漁するに抄網を用ふ漁業の季節は凡三月中旬より四月下旬までにして網の構造は周邊は松木を用ふること前記安房の鰹張網の如く網口の徑上下は四尺左右は三尺許にして略楕圓形を爲し囊は凡て麻絲の綟子織にして深さ五尺許に作る漁法は海岸を距ること一里内外の沖合に方言「アゲドリ」と稱する水禽の群聚飛翔するを見るときは是玉筋魚を驅て追啄する象なるを以て小船に漁夫三人乘にて漕出し玉筋魚の驅逐せられて岸に向て寄り來るを擡網を挿入れ抄ひ捕るなり又時としては大魚の爲め圍繞せらるゝを抄ふことあり前記鰯の餌床に同し

## 五、鮭鰺網

豊後國北海部郡に於ける鮭鰺網は九月十月の候土佐海或は日向海の沖合まで特に出漁し使用するものにして其構造は周邊は鐵製小指大の輪を用ひ其直徑三尺五六寸網目は五寸間に七節囊の深さ凡六尺柄は檜にて手輕に製す長さ凡八九尺とす

漁法は船一艘に漁夫三四人乘にて出漁し魚群を認むれば先つ網を海中に下し而して豫め鰺を煮て十分に細碎せるものを船中に貯へ置き之を其傍に投下す魚は此餌を食はんとして集り來るも投し居る餌の爲め海水の濁れるを以て網あるを覺り得ず知らず識らず網中に陷るとき漁夫は持ちたる網の柄を急に捻るが如く爲して網口を塞がしめ之を引揚げ捕獲す其機會間髪を容れざるものにて頗る熟練を要す故に多くの漁業中能く其術を得たる者は概ね十中の一に過ぎずと云ふ

## 六、鮎抄網

鮎を抄ふに擡網を用ふるは所在爲す所にして大低春季小鮎の河川に沂るときに於てするを多しとす其構造は概ね周邊は藤を以てし或は眞鍮線を用ふ大小齊しからずと雖大なるは徑二尺餘小なるは一尺内外柄は多くは篠竹を以てし長さ三

四尺乃至五六尺網は細き麻絲を用ひ網目五寸間二十五節位より魚の長するに及んでは漸く疎目なるを用ふ中には生絲にて製するものあり之を使用するには河流の淺瀨に石を積み其上に踞し或は便宜の處あれば岸上より網を下し鮎の昇り來りて網に上るを見て最も神速に抄ひ揚ぐるなり此漁は一見殆んど兒戯に類すれども鮎の多産の地に於て盛に浜る季節には熟練者は網を擧ぐるに終日空網なく非常の漁利を得ることあり

## 七、紀伊國有田郡に於ける鮎抄網

紀伊國有田郡有田川の上流なる松原村に鮎瀧と稱する處あり兩岸より巨岩横出し有田川の激流之に壁められ中央の缺處より瀑布の勢をなして流下す其高さ凡八尺幅一丈餘あり春夏の際鮎河川に浜り來り瀑に阻められて其下の淵に群聚し尚ほ上流に上らんとして一躍水を離れて飛跳す其疾きこと電閃に似たり此時漁夫其巖石間に立ち攪網を以て抄ひ捕る其技巧妙一回に數百尾を得世に松原の鮎瀧と稱し頗る奇觀とし故さらに遊覽に赴くものあり斯かる漁場なるを以て攪網の構造前者に比すれば稍や大にして堅牢なり柄の長さも七尺に至る漁季は六月より九月まで四ヶ月間に至るを以て網目の細大一ならず初期は四分目より起り末期六分目に至る又此瀑下に於て「モドリ籠」と云ふを使用す籠具の部に於て詳記すへし

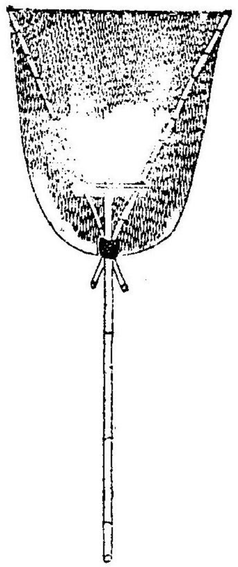
## 八、紅蟲捕（アカゴドリ）

大和國添下郡山町及び添上郡大安寺村邊にては專ら金魚を飼養するを以て其餌料に供する紅蟲を捕るの具なり紅蟲とは「アカコ」と稱し關東にて「ミヂンコ」と稱する小蟲の種類なり其捕具の製攪網に異ならずと雖囊甚だ長し網口の徑一尺八寸にして周邊は鐵線を用ふ囊は三段に分ち網口より下七尺五寸の間大和木綿の太織を用ひ其下を五尺底を六尺とし共に上等の天竺木綿を用ふ其口の方濶く底に至て漸く殺く柄は竹にして長さ四間許あり囊の底は綴ぢず之を使用するに際し繩にて括り野中の泥溝等「アカコ」の發生せる處を見て之を下し網口を傾け泥の上層を横さまに摩するが如くなして「アカコ」を抄ひ入れ幾回も斯の如くし終に底の繩を解き別器に水を盛りたる中へ泥と共に移し入れ淘汰して其「アカコ」のみを採收するなり

## 第二　纏（サヲ）網

纏網は大体の形狀に皆同じと雖小局部に至ては種々の差異ありて一々圖出し難きのみならず之を解說するも亦以て煩に堪へざれば玆に普通多く在る所のもの一圖を掲げて餘は皆省略す而して普通のものと雖二本の竹を兩側とし手元の方を板に貫き末端を交叉し之を柄と共に繩にて締括し其頭の開きたる方は繩にて張り此繩と兩側の竹とに網を結び付くるあり或は兩側若くは柄も共に木を用ふるあり或は頭の一面も亦竹若くは木を用ふるあり柄の甚だ短きあり全く柄を闕如し兩側の竹若くは木を把持して使用するあり又網底の深淺も一樣ならず要するに其捕らんと欲する所の物と漁場の景況等に應ずるものなり其中專ら一物を捕獲する目的のものは別に標記すべしと雖今先づ何種の魚を論せず在るに隨て捕る所の普

第百三十六圖　纏網

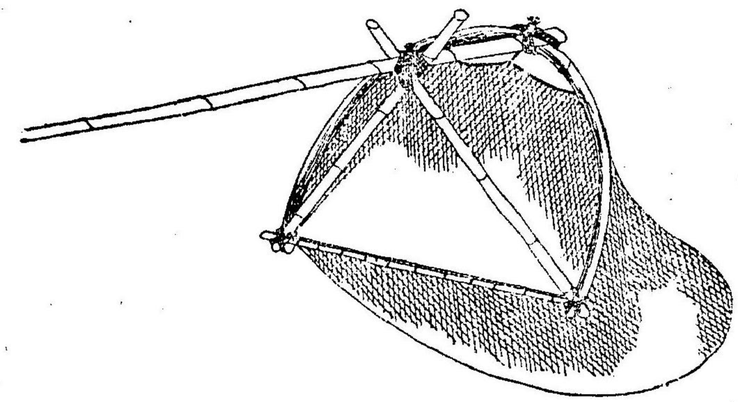


通纏の網に就て其梗概を記す

雜魚を捕るの纏網は河川の水淺き處若くは流水蘆葦叢生の間或は溝渠又は池沼又は田圃間の用水路等に於て農民の餘暇に之を爲し或は雜業者の兼業とし或は霖雨新たに霽るゝの後の如きは遊漁に之を爲す者あり此漁を以て專業とする者は稀にして或は之あるも老幼輩の纔に生計を支ふるに過ぎず故に季節に定まりなく又晝夜の別なし網の大さも小なるものは兩側の竹木の長さ三尺內外より大なるものは五六尺に至る其網は綟子を用ふるあり或は極めて細目の麻絲網を用ふるあり之を使用するに魚の影を認めて網を下し抄ひ捕るあり先づ網を上流又は下流に向て沈め置き魚の其上に昇るとき急に擧げて抄ひ捕るあり又木挺を以て潛在せる魚を驅て網中に入れ捕獲するあり是等は概ね單獨にて使用す又鵜繩を曳き魚を網中に驅入るゝものあり此の如きは其鵜繩を曳くもの一人或は二人を要す大抵水中を徒行し若くは陸上より使用すれども時としては小船に棹さし使用することあり

又一種搔纏と稱するむり嚴冬亙寒の際藻中に潛匿せる雜魚を搔き出し網に陷れ

第百三十七圖　掻網



て捕ふるものなり其形普通のものと少く異なる所あるを以て茲に圖出す之を使用するには河岸よりするあり水中を渉りて爲すものあり漁場の形勢に由て同じからず此漁は場處に依ては雜魚の捕獲多く貧民賴て以て生計を支持するに足るものあり

肥後國飽田郡中には多く「引タブ」と云ふを使用す其形狀前者掻網に同じと雖下綠の竹に鐵釘十八本許打込みたるを異なりとす此具は海に使用するものにして退潮の際深さ二三尺位の處を徒行し海底を掻き廻し靴底鰈、鮴等の類を捕獲するなり

## 一、白魚網

白魚を漁する抄ひ網は擂網あり又纏網あり阿波國吉野川の流末なる板野郡各村に使用するものは網口正圓形の擂網にして周邊は松木を用ふること前記安房の鰛張擂に同じ口徑三尺餘囊は綟子製にして深さ三尺許とす季節は陰曆十二月初旬より翌年二月下旬までにして漁法は小船一艘に漁夫一人乘にて暗夜に乘じ篝火を舷外に焚き魚の火下に集まれる頃ほひ網を水中に入れ拐を船舷に支へ抄ひ揚げ捕獲するなり

### 甲　備前地方に於ける白魚網

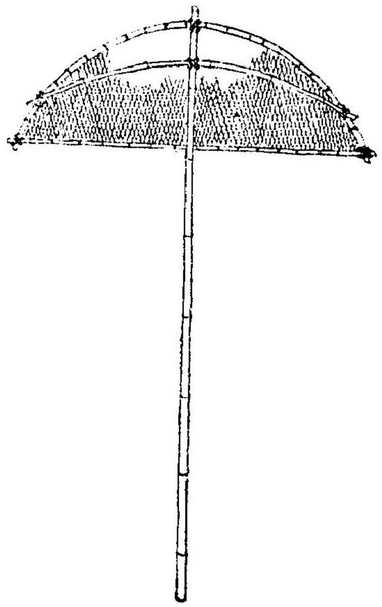
備前國に於ける白魚網は纏網にして其形狀は前に圖せる普通の纏網に異なる所なく亦綟子を用ふ漁法は前者阿波國のものと更に差ふ所なし

### 乙　豐後地方に於ける白魚網

豐後地方に於ける白魚漁は敷網を以てするものあれども亦抄網をも用ふ即ち纏網にして其製は布を用ふ而して網の兩側の竹の末端を交叉して括り合せたるのみにして拐を附せず漁法は前者に異なりて漁者二人を要し徒行して水中に入り一人は網を下流に構へて待ち一人は上流より河岸に沿ひ嚇し竹を以て水中を擊ち魚を逐ひ下し其網に入るを見て引揚げ捕獲するなり

## 二、公魚（ワカサギ）網

第百三十八圖　公漁網



出雲國出雲郡三部市村內斐伊川の支流の宍道湖に注がんとする處に於て使用する公魚網は丸竹二本を屈撓して圖の如く結ひ合せ更に之を一本の劈竹の兩端に結ひ附け丸竹の柄を添へ之に網を結ひ附けたるもの網口卽ち劈竹の長さ六尺網の深さ五寸網は麻絲製四分目柄の長さ四間とす漁業の季節は四月より五月中にして晝間の業とす漁法は漁夫一人にて陸上に在り柄を把て網を水中に下し魚の入來るを見て引揚け捕獲するなり

## 三　鰕抄網

鰕抄網には擡網あり纏網あり又前記出雲國の擡網の形狀に類似せるものあり擡網は鰕の種類に依り綟子を用ふるあり麻絲網を用ふるもあれども紀伊國和歌山近傍に於て川鰕を捕るものゝ如きは概ね生絲を以て製す川鰕にも數種あるを以て網目に細大あり大抵四分より二分目に至る而して目の細大に應し口徑を異にす大者は二尺餘小者は一尺內外皆周邊は篠若くは眞鍮線を以て正圓形に作る冬季の外は大抵漁せさるなく概ね陸上に在り柄を把て抄ひ捕るものなり

### 甲、下總國利根川沿岸の鰕漁

下總國利根川沿岸及び印旛沼、手賀沼、長沼等に於ける鰕網は主として糠鰕を漁するものにして漁期は大約二月より四月まで及び十一月の間とす其網は圓纏網にして大小あり大者は兩側の竹の長さ凡九尺網口の幅凡六尺囊の深さ凡五尺「サイミ」布を以て作り長さ九尺許の竹の柄を附く是專ら船上より使用するものあり小者は側竹の長さ凡四尺網口の幅凡二尺五寸囊の深さ凡二尺亦「サイミ」布を以て作り柄の長さ一丈許とす是專ら陸上より使用するものなり漁法は篠又は柴等を束ねたるものを水中に浸し置くこと兩三日すれば鰕其處に群集するを以て漁者其期を測り場處の淺深に應じ或は船を出し或は陸上より網を下し抄ひ捕るなり又一種前曳網と云ふあり、亦纏網にして簍は櫻樹の枝を以て作り大さ略ほ前者の

陸上より使用するものに同じ麻絲製極細密の網地を用ひ囊の深さ二尺三寸許とし長さ二間半許の竹の柄を附く是糠鰕より稍や大なる小鰕を捕るものにして之を使用するには陸上より水中に下し或は向より手元へ或は横に搔き寄するか如くなして抄ひ捕るなり

乙　陸前地方に於ける鰕抄網

陸前地方の池沼に於て川鰕を漁するに用ふるものは則前記出雲國の公魚網の形に類せるものにして囊口を張る横竹は長さ八尺とし之に長さ一丈一尺の竹二本を屈撓して半月狀をなさしめ横竹の兩端に結ひ附け其二本の竹は中央にて二尺許の距離を保たしめ之に麻絲網を結ひ附く網目は二分或は三分乃至四分のものあり唯柄を附けずして長さ二十間許の綱を附け之を船上より下し其綱を繰りて網を船に擧け入たる鰕を捕獲するなり故に稍や繰網類に似たる所あれども別に沈子を附けず且多く船を運用して水底を引曳することを爲さず全く抄ひ揚るなり時としては淺處に於ては柄を添へて手にて使用することあり

丙　北海道渡島地方に於け鰕抄網

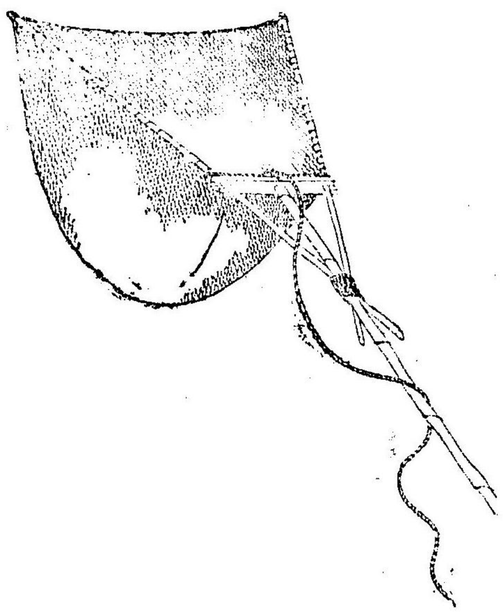
北海道渡島地方に用ふる鰕網は略ほ前者陸前國のものに同しと雖唯網口の横竹に換ふるに一條の麻繩を以てし且長さ丈餘の木柄を附け總體稍や小形なり之を使用するには河流の淺處纔に腰を沒する處に至り本柄を把り網口を開て水中に沈め上流より鰕其他の小魚を逐ひ下し網に陷らしめて抄ひ捕るなり

四　手押網

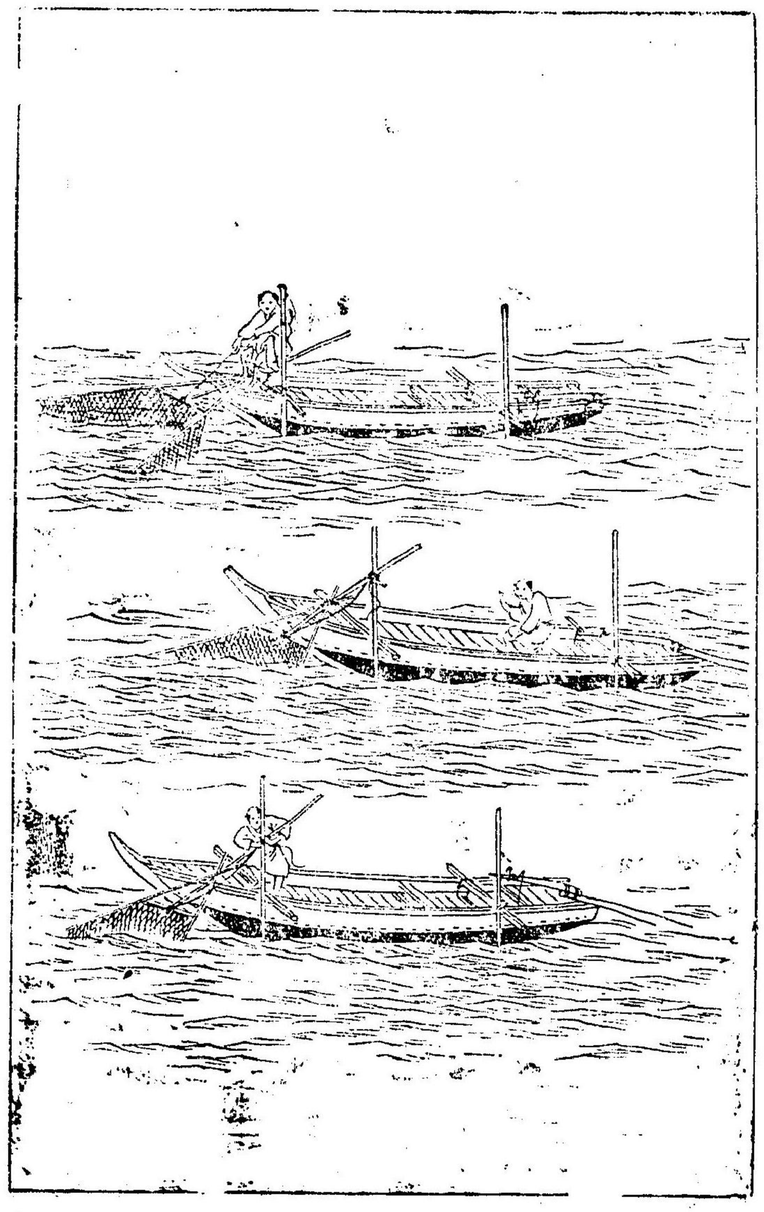
肥前國南北高來兩郡の沿海及び有明海に使用する手押網は專ら泥海に用ふる大形の纜網にして摺鰕に製すべき小鰕を捕獲するものなり漁業は四季不斷之を爲す

網の構造は麻絲製二分目網口の幅二十尺網尻の幅八尺丈け二十尺左右端は杉の丸材周圍一尺五寸長さ

第百三十九圖　手押網



第百四十圖　手押網使用圖





二十七尺のものゝ一端を交叉したるに結ひ付け其手元の方には長さ八尺の横棒を架し之に網尻を結ひ付く又網口と網尻の縁には麻三つ絢周圍五分の縁繩を通し其端を左右の縁木に結ひ付け網尻の縁の中央には一條の苧小繩二十尺を付け網を擧くるとき之を引き蝦の逃逃を防くに供す

漁法は小船一艘に漁夫一人若くは二人乘組み沿海要處に漕出し樫木の杙長さ凡四尋周圍一尺許のもの二本を海中に立突て之に船を繫ぎ潮流に向ひ網を下し網尻の柄を船の中央に立たる棒に括り付け凡一時間を經て棒の結ひを解き網の柄を兩足にて蹈み抑ゆれば網先き海面を離れ蝦は網の中央に集まるを方言打取と稱する搖網を以て抄ひ捕るなり

## 五　方流網

石見國那賀郡三隅川、周布川、濱田川等に於て鮎鰍其他雜魚を漁する具にして季節は六月頃より十月頃までとす網は纏網に同しく麻絲にて四分目位に製し四方には麻製の縁繩を附く左右兩側は長さ一丈三尺の丸竹に結び竹の手元の方を交叉し之に長三尺五寸の樫の丸木を横ふ又別に鵜繩あり苧にて長さ三丈五尺に作り

凡三尺距離毎に鷗鷺又は鴉の羽を挿し或は紺染の木綿裂れを結び付け小石の沈子五個を附く

漁法は漁夫三人にて降雨の後河水濁りたるとき淺瀨の水勢甚だ急ならざる處を擇み一人は網を水中に刺入れ上流に向ひ他の二人は凡十間許の上流より鵜繩を張り水上を曳き逐ふて網の方に至り己に接近したるとき網を擧げ入りたる魚を捕ふるなり漁獲多きときは一同にして十四五尾を得ることあり又平水の時暗夜に乘じ漁夫二人にて一人は網を持ち前の如く上流に向て立ち一人は凡十間許河上より炬火を振り水中を下れば魚は驚愕し下りて網裏に入るとき網を擧げ捕獲することあり方言之を火振りと云ふ

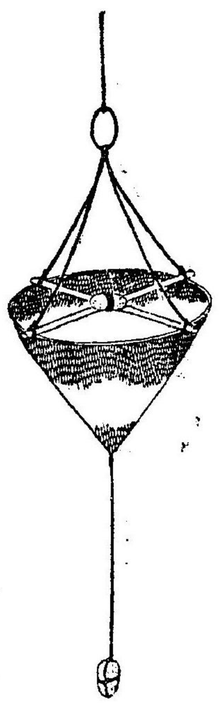
## 六　羽根川網

因幡國智頭川、八東川、千代川等に於て使用する羽根川網は主として鮎を捕ふる具にして網の構造及び使用法に至るまで前者石見國の方流網と多く異なる處なく殆んど同物異稱とも謂ふ可く唯僅の少差あるのみ漁業の季節も亦相同し今其少差ある要點を掲ぐれば鵜繩は藁繩にて製し長さ三十尋とす而して之に鳥羽を挿むは普通なれども近來は多く柳の葉附の枝を以てす是柳葉は裏面白色を帶ぶるを以て水中を曳くときは閃々光りあり以て魚を驚かし易きが故なり漁法は漁夫五人にて其二人は鵜繩を曳き三人は川の下流の中間に在て各自網を持ち魚の鵜繩に逐はれ來りて水上に飛躍するものを抄ひ捕るに在り此漁は專ら晝間にのみ之を爲す

## 七　鰺網

出雲石見の沿海に於て鰺を漁するに用ふる一種の抄網あり其構造は麻絲を以て圓の如く圓錐形に編み之に口輪を附け下端へ重量一貫五百匁の石を吊下け網口の徑は六尺とし此に十字形の樫木を架し四端に各長六尺の麻繩を結び其末端を集めて一筋の元綱に繫き附く元綱は麻にて作り長さ二百五十尺とす

第百四十一圖　鰺網



漁業の季節は六月より九月までにして專ら晝間の業とす漁場は海岸を距ること三里内外深さ二百尺より二百五十尺の處とす

漁法は漁夫二人小船に乘り網口の十字架の處に水母を括り附けて餌となし之を海中に垂下し元網を船舷に繫き置けば魚は水母を食はんとして十字架の處に集まる元來鯵の性たる物に驚けば水底に潜入するものなるを以て其網上に集りたる機を測り急に一動すれば魚輙ち囊底に入る爰に於て元網を手繰り引揚ぐれば容易に捕獲し得るなり其多きときは一擧して百尾を得ることあり

網習漁業終

明治四十四年七月十一日印刷
明治四十四年七月十五日發行

定價金貳圓

編纂者　農商務省水産局

發行兼印刷者　東京市芝區松本町二十三番地　野田千太郎

印刷所　東京市芝區三田四國町二番地　合資會社三田印刷所

發行所　東京市芝區松本町二十三番地　水産書院

振替口座一五八五〇番

267
140

農商務省水産局編纂

# 日本水産捕採誌

上卷

東京　水産書院發行

267
140

065675-000-7

特24-832

日本水産捕採誌　上巻

農商務省水産局／編

M44.7

CCF-0354